

三省堂 高校英語教育

2012年 夏号

巻頭エッセイ

マドゥーとボスニアと三陸地方への想い 貫戸朋子 …… 1

特集

「新教科書」—これからの英語教育

- 新しい「高等学校外国語学習指導要領」と英語指導の改善 小串雅則 …… 2
- 『CROWN English Communication I』の編集方針とその概要 霜崎 實 …… 6
- 『MY WAY English Communication I』の特長—EXCEEDの「不易」をさらに強化— 森住 衛 …… 9
- 『VISTA English Communication I』の編集方針 金子朝子 …… 12
- 『CROWN English Expression I』の編集にあたって 松原好次 …… 15
- 『MY WAY English Expression I』の編集方針と内容紹介
—英語のしくみを学び、論理的な表現力を養う— 飯田 毅 …… 18
- 『SELECT English Conversation』の編集方針と内容 北出 亮 …… 21
- 『CROWN PLUS Level 3 New Edition』の特長—改訂を終えて 山本史郎 …… 24

英文エッセイ Don Maybin …… 26

2012年度センター試験の分析と対応 渡辺 聡 …… 28

インド便り 村井佳世子 …… 表紙裏

表紙写真について 望月尚子 …… 表紙裏



インド ハラハラドキドキ旅行

日本大学 村井佳世子

急に時間ができて大学生の娘とタージマハールを見に行こうということになり、何の予備知識もなくインドを訪れたのは3年前の春だった。機内でガイドブックを開き個人旅行にはトラブルがつきものとするのと知るも、後の祭。無謀な女二人のドキドキハラハラ旅行が始まった。

デリーの薄暗い空港に着くと生温かな湿った空気が肌をなでる。事前に支払いをし、クーラーのない薄汚れたタクシーに乗り込む。驚いたことに、デリーでは車が通れそうな隙間があると我先に割り込もうとするので車は車線に関係なく走っている。あちこちでぶつかりそうになるためクラクションが鳴っている。インドに来て交通事故にあっては大変と内心ハラハラしたが、平気な顔をしている運転手の様子では日常的なことらしい。信号で車が止まると、身体の不自由な大人や貧しい身なりの子供たちが車と車の隙間をぬって近づいてきて車の窓から手を突っ込もうとする。物乞いに構うなと運転手に言われる。インド到着後30分足らずの強烈な体験でたちまちドキドキである。

翌朝、車をチャーターしてタージマハールのあるアグラへ向けて出発。砂埃をあげる田舎道を揺られること5時間。道中の街路や農業地帯の光景は、インド初体験の身には新鮮だ。とにかく人が多くて活気がある。裾まで引きずるサリーに身を包んだ女性たちが暑さの中で畑を耕している。

途中立ち寄った観光地には、それぞれ運転手の仲間のガイドが待機。その度に案内料は交渉次第で、ぼられるのではと構えたが、彼らはただ生活の糧を稼ごうと必死なのだということがわかった。



タージマハールの前で▶

運転手が案内してくれた一見普通の大家食堂の食事は、いずれも非常に美味。「一緒に食べないの」と運転手に尋ねると、「我々はこんな高級な所では食べられない」と笑って言う。食堂のトイレではティッシュを差し出す身分の低い女性にチップを求められどぎまぎ。今更ながら日本とは比べものにならない貧富の差と通貨価値の違いを思い知らされた。

さて肝心のタージマハールは、そのスケールと建築様式に目を見張った。これが17世紀の王妃の墓なのだから驚きだが、ここでも観光地に多い物乞いと土産物売りに遭遇し、歴史に残る贅沢な建造物と現代社会の一面とのギャップに考えさせられる。折しも祭日でインド人の家族連れであふれる光景には心が和んだ。さながら伊勢神宮への家族旅行といったところだ。

デリーでは、遺跡や歴史的な名所や独立運動の指導者ガンジーが暗殺された場所を訪れたが、いつの間にか市街地の喧騒や街中のクラクションの音も気にならなくなっていた。そこにはインドの活気ある人々の生の生活があった。不用意な親子二人の旅は、こうして無事幕となった。



表紙写真
について

フィレンツェにて

東京都立小石川中等教育学校 望月尚子

写真は、フィレンツェのサンタ・マリア・ノヴェッラ教会。9世紀頃にこの地にあった礼拝堂が起源。13世紀に修道士たちが教会を建て、人々の救済のための看病部屋を作り、庭にはハーブを栽培し、薬剤を調合していた。それが現在、サンタ・マリア・ノヴェッラ薬局として、近くで営業している。800年以上続く世界最古の薬局である。自然治癒を目指し、ハーブ製品を作っている。入るのを拒んでいるような、がっしりとした扉を開け、人気がない薄暗い廊下をぬけると小部屋がありその奥の部屋がようやく売り場らしい。思いのほか客はたくさんいるが、日本のように、品物が並んでいて商品の説明が書いてあったりはしない。近寄って来る店員もいない。壁に並ぶガラスのケースに、商品は美術品のように展示されている。日本と全く違う雰囲気呑まれてしまいそうだ。

フィレンツェのもう一つの象徴であるドゥオモ（大聖堂）のクーポラ（楕円状の天井部分）に上ろうと、外の行列に並ぶこと1時間。やっと中に入れたと思ったら、一人一人が通るのがやっとの石段を490段も上がらなければならなかった。息をきらしながら、登りきった先に見えた街並みの美しさは圧巻だ。赤茶系の建物の波間に教会の尖塔がそ

びえ立つ。空の青さとのコントラストが美しい。「冷静と情熱のあいだに」という恋愛小説の舞台で、映画化もされた。その美しい街並み全体を、アルノ川をはさんだ対岸から眺めることができるのがミケランジェロの丘。そこを目指して、どこまでも続く坂道を、汗をふきながらひたすら足を運んだ。でも、ドゥオモの時と同じだ。到着して目に飛び込んできた光景。川の向こうに広がる中世の街並み。苦労した後のさわやかな達成感とともに、決して忘れることのできない光景となった。

夕方、サンタ・マリア・ノヴェッラ教会の前の広場で夕涼みをしていると、「日本人ですか」と、バックパッカーの日本人青年が話しかけてきた。聞けば東京の大学生で、もう一カ月もヨーロッパを旅しているとのこと。周囲の友人はあまり海外に出ることに興味を持っていないので一人旅なのだそうだ。私たちがレストランで食事していると彼が入ってきた。バックパッカーも最近は贅沢になったな、と感心。私がバックパッカーしていた頃は、宿泊はユースホステル、昼食には、ユースで出た朝食のパンをとっておき、夜はスーパーで買った食材で安上がりに済ませていた。そういえば、彼は、宿泊もユースではなく、ホテルだと言っていた。でも、「もっとハングリーでないと」、なんて説教じみたことは言わない。どんな形でもいい、彼のように外に飛び出そう、いろいろ見てやろう、という若者がもっと増えてほしい。

マドゥーとボスニアと三陸地方への想い

医師 貫戸朋子



マドゥー（スリランカ）にて

“Crossing the Border” (CROWN II Lesson 4) を全国の高校の先生方が熱心に教えてくださり、そして、生徒の皆さんが何かを感じ考えて読んでくださっていることを伺い、なんだか恥ずかしいのですが、とても嬉しく思い感謝しております。

マドゥー難民キャンプの日常生活とその日々を通して考えたことを、慶応大学の霜崎先生が美しい英語で表現してくださいました。私が経験したことは、決して特殊なことではありません。世界のいたるところで起こっていることで、私が感じたこと考えたことは、人の役に立ちたいと海外や日本で働いた経験を持つ多くの人々と根っこ部分を共有していると思っています。

マドゥー難民キャンプでは、内戦で家を追われた人々が助けあって整然と暮らしていました。故郷に帰れない日々が長くなって、お年寄りも難民生活の中で亡くなり、いっぽう難民キャンプで生まれた子どもたちがすくすく育っていました。子どもたちは、まさに希望の星でした。が、その子どもたちも、成長するにつれて、大人たちの苦悩と憂鬱を感じるようになり、自分の故郷は難民キャンプではないことを知り、きらきらした顔に淋しく悲しい表情を見せ始めるのでした。

ボスニアでは、民族浄化により国土が徹底的に破壊つくされました。出張中に町が攻撃され、妻と小学生の息子と娘を殺されて焼かれて、肌身離さず持っていた写真だけが残された男性。村で

たった一人生き残って彷徨っていた耳の聞こえない幼い男の子。地雷原を逃げ惑う中に子どもを失い二度と再会することのなかった母親。住民を山に避難させた後に、極右武装勢力へ交渉に向き処刑された警察官。

「つなみてんでんこ」という言い伝えが三陸地方にあることを、2011年3月11日のあとに知りました。「津波が来たら、親も子も捨てて真っ先に逃げよ」。生半可では生きていけないと宣言しているかのこの言葉に私は衝撃を受け、この言い伝えを生み出した三陸地方の人々に心底敬服しました。しかしながら、実際はこの言い伝えを超越して、人々を助けようとして、あるいは助けて逝った人々が大量に亡くなったのでした。

生き残った人々、愛する人を失った人々は、どのような思いで毎日毎日暮らしておられるのでしょうか。想像しようとするだけで苦しくなるのですが、きっと自問自答を繰り返してられるに違いありません。生き続けなければいけないと思いなおしても、苦悶苦闘してられるに違いありません。ただ一つ私にもわかることは、生き残ってくださって、生きていてくださってありがとうと皆が心から思っていることです。

3月11日の東日本大震災で亡くなられた人々、お年寄りから赤ちゃんまであらゆる人々に想いを馳せるとき、私はこの人々は私たちの代わりに犠牲になってくださったという気がしてならないのです。それでは、犠牲者への弔いはどうすればよいのでしょうか。私たち一人一人がこれからのどのように生きて、どのような社会を築いていくか、そのことが課せられていると考えます。

特集 「新教科書」— これからの英語教育

新しい「高等学校外国語学習指導要領」と英語指導の改善



元文部科学省初等中等教育局主任教科書調査官・視学官 小串 雅則

はじめに

平成23年度には、「外国語活動」が新設された小学校学習指導要領が実施された。今年4月には週当たり1時間の指導時間増となった中学校英語の指導要領が実施されている。そして、平成25年度には、新しい科目構成となった高校英語の学習指導要領が実施されることになる。この小論では、まず初めに日本の学校教育の内容に関わる3つの要素について簡単に述べる。続いて、今回の学習指導要領改訂の背景を確認した上で、高等学校外国語の主な改訂点を整理するとともに、求められている教科指導の姿について述べる。最後に、英語の学習指導の改善方策について私見を述べることにする。

学習指導要領、教育課程と指導計画、
検定教科書

日本の小学校、中学校、高等学校の各教科等の指導内容の決定には、文部科学省が告示する学習指導要領、各学校が編成する教育課程及び指導計画、民間の教科書会社が編集して文部科学省が検定する検定教科書の3つの要素が関わっているとみることができる。まず初めに、学習指導要領とは、各学校が教育課程を編成する際の基準であり、その「総則」によれば、「当該科目を履修するすべての生徒に指導するものとする内容の範囲や程度」を示したものである。次に、教育課程は教科指導の目標、内容及び時数を主要要素として各学校がその教育目標や生徒の実態に合わせて編成するものであり、さらにそれに基づいて教科の指導計画を作成し、具体的な授業を展開することになる。このように、学習指導要領において総括的、理念的に述べられている教科・科目の目標や指導内容が教育課程の編成や指導計画の作成を通じて授業内容へと具体化されていくので

あるが、この過程で重要な役割を果たすのが、第3の要素である検定教科書である。即ち、学習指導要領、教育課程及び指導計画が教科指導の枠組みを設定するのに対して、検定教科書は、教科指導に用いる「主たる教材」として、具体的な指導内容を提示することによって教科指導の枠組みに中身を提供することになるからである。

「学習指導要領」改訂の背景

前回の学習指導要領の改訂（中学＝平成10年、高校＝平成11年）に対しては、主に理数科目について学力低下を懸念する声があがった。加えて、国際的な学習到達度調査であるPISAの結果において、数学的リテラシーや読解力の低下が明らかになったことなどもあった。このような環境のもとで行われた今回の学習指導要領の改訂は、学力向上をその最優先課題としていたといえよう。その結果、「生きる力」の育成を目指したいわゆる「ゆとり教育」に対しては、「生きる力」の育成という理念を踏襲しつつも、方法論についての変更をせまることになった。また、学習指導要領の具体的な改訂では、「学習指導要領の基準性（学習指導要領に示された内容がすべての児童生徒に指導すべきものであり、児童生徒の実態に応じてそれを越えた内容を加えて指導することもできるということ）」に基づき、指導内容に制限を加えるような、いわゆる「はどめ規定」を改め、発展的な学習内容の扱いを容易にする改訂も行われた。外国語教育に関しては、小学校に「外国語活動」を設けるとともに、中学校での「英語」の指導時数を週当たり1増加させることになった。さらに、高等学校の外国語では、英語に関する科目が再編され、総合科目である「コミュニケーション英語Ⅰ～Ⅲ」を中心とした新たな科目構成が示された。

「学習指導要領」の主な改訂事項

ここでは新しい高等学校外国語の学習指導要領の主な改訂事項のうち、(1) 科目の再編、(2) 「コミュニケーション英語基礎」及び「コミュニケーション英語Ⅲ」の新設、(3) 言語材料の扱い、(4) 「英語で授業」、(5) 教材及び題材の5点について述べる。

(1) 科目の再編

今回行われた高等学校外国語の学習指導要領改訂では、科目の再編が最も大きな改訂であったと考えられる。英語に関する科目は、昭和35年の学習指導要領以来、平成元年の学習指導要領に至るまで、一貫して4技能を意識する中で、「総合から細分化へ」という方針で改訂されてきたとみることができる。即ち、昭和35年の学習指導要領は、3年間をまとめて英語A（9単位）、英語B（15単位）としていたが、その後の改訂では4技能と学年に応じた科目の細分化を繰り返してきているのである。その最終形ともいえるのが、平成元年の学習指導要領であり、学年及び4技能ごとの科目設定について一つの完結型を示しているともみることができる。それに続く平成11年版は、「聞く」と「話す」の再統合を行い、オーラル・コミュニケーションの科目を2つに統合したが、基本的には元年版を踏襲しているとみることができる。

以上のような細分化への流れに対して、今回の改訂では、英語会話という例外はあるが、4技能を柱として科目構成を行うという考え方を改め、科目の総合化へと軸足を移した。即ち、オーラル・コミュニケーションⅠ、Ⅱ、リーディング、ライティングなどの技能ベースの科目を廃止し、新たにコミュニケーション英語基礎、コミュニケーション英語Ⅰ～Ⅲ及び英語表現Ⅰ、Ⅱに再編したのである。これにより、4技能の総合的な指導によるコミュニケーション能力の育成を目指している。授業に当たっては、4技能を個別に扱う指導から「4技能の総合的な指導」へのシフトが大きな課題となるであろう。

(2) 「コミュニケーション英語基礎」及び「コミュニケーション英語Ⅲ」の新設

新設されたコミュニケーション英語基礎とコミュニケーション英語Ⅲの2つについては、その意義を明確にしておくことが必要であろう。まず、コミュ

ニケーション英語基礎であるが、新設の意図は中学校と高校との円滑な接続を図るということである。これまで、高校では新入生の実態に合わせて中学校の復習を指導計画の中に組み込んできたと考えられるが、それに特化した科目が新設されたことで、中高の接続が一層図られることになる。指導に当たっては、中高の接続という趣旨を理解し、単なる中学校の復習に終わることのないよう、指導計画に工夫が必要であろう。

一方、コミュニケーション英語Ⅲの新設には、高校3年間を通じた英語指導に大きな影響を与える可能性が感じられる。即ち、コミュニケーション英語Ⅲは、科目構成の中心となるコミュニケーション英語Ⅰ及びⅡに続く科目であり、その指導目標は、高校3年間での英語指導の目標の最大値を示しているともいえるのである。コミュニケーション英語Ⅰ～Ⅲの指導計画の作成に当たっては、目標にある「社会生活で活用できる」コミュニケーション能力の具体的な中身について検討するとともに、そこに至るまでの各学習段階で育成すべきコミュニケーション能力について、体系的に検討することが必要となるであろう。このことは、後にふれる到達目標の設定と関連して、高校での英語指導の全体像を描く上でたいへん重要な課題である。

(3) 言語材料の扱い

今回の改訂で、新たに「第3款 英語に関する各科目に共通する内容等」が設けられたことも大きな改訂事項であろう。第3款に示された事項は、言語の使用場面と働きの例、言語材料、言語材料を用いるに当たった配慮事項、英語を用いた学習指導などであるが、これらをまとめて示したことは、それらの扱いを重視しているとみられる。ここに示された諸規定の趣旨を適切に理解し、指導の改善に活かすことが必要である。

文法事項の扱いでは、現行の学習指導要領は、文法事項を始めとする言語材料を科目の目的に応じて適宜選択して扱うことにしている。今回はこれを改め、コミュニケーション英語Ⅰで文法事項をすべて扱うことにした。これによって、中学3年間と高校1年の4年間で、主要な文法事項を一通り学習するという指導方針が示されたことになる。

語彙や連語に関しては、中学と高校で扱う新語数

が増加したことが話題になった。即ち、中学校の新語1,200語に加えて、コミュニケーション英語Ⅰで400語程度、Ⅱ及びⅢで各700語程度の新語を扱うことになった。これらの新語数を現行と比較すると、同じ単位数の科目でありながら高校の英語Ⅱの500語に対してコミュニケーション英語Ⅱでは700語を扱うことになっている。また、コミュニケーション英語Ⅲでも4単位に対して700語を扱うことになっている。このような新語数の増加に加えて、「実際に活用できるよう指導する」という配慮事項も示されており、語彙指導には、かなりの工夫が必要になるであろう。

(4) 「英語で授業」について

今回の高等学校の学習指導要領改訂でとりわけ話題となったのが、「英語の授業は英語で」であった。外国語指導助手の導入以来、英語での指導が、程度の差こそあれ、一般に受け入れられているのが現状であろう。そのような状況において、改めて「英語で授業」を学習指導要領に書き込んだ趣旨は、学習指導要領にもあるように、英語の「授業を実際のコミュニケーションの場面にするため」である。

コミュニケーション能力の育成には、実際にコミュニケーションを図る活動が不可欠である。「英語の授業は英語で」についてもこのような指導原理の延長線上で取り組むことが必要である。最終的なゴールはあくまでも生徒のコミュニケーション能力の育成であり、英語で授業をしても生徒の学習段階を無視して教師の自己満足に終始したのでは、このゴールには到達しないであろう。

(5) 教材及び題材

教材の扱いについては、「外国語を通じてコミュニケーション能力を総合的に育成する」という外国語の指導目標に応じて、実際の言語の使用場面や言語の働きに十分配慮したものを取り上げることが規定された。また、題材については、新たに「伝統文化や自然科学」が示された。「伝統文化」は、平成18年12月の教育基本法の改訂において、教育の目標に新たに「伝統と文化を尊重する」ことが示されたことに連なる改訂である。また、「自然科学」は、現代社会におけるその重要性に鑑みて付け加えられたものであろう。

今回の改訂を学習指導にどう活かすか

ここまで学習指導要領の主な改訂事項について述べてきた。それを踏まえて、求められている教科指導の姿について私見を述べてみようと思う。

①「コミュニケーション英語」と「英語表現」の連携を図り、コミュニケーション能力を総合的に育成する
現行の学習指導要領では、総合英語である英語Ⅰ及びⅡに対して、4技能をベースとしたオーラル科目やリーディング、ライティングなどが設けられている。これらの技能をベースとした科目は、英語の4技能という接点で、総合英語である英語Ⅰ、Ⅱと発展的に関連づけられている。それに対して、今回の学習指導要領では、コミュニケーション英語の目標に対して、英語表現の担う課題は「伝える能力」のさらなる深化ということになる。従って、これら2つの科目を選択する場合には、「伝える能力」の育成を両者の指導の中で発展的に関連づけて行うための指導計画が必要となるであろう。

「伝える能力」の育成には、伝える活動、即ちコミュニケーションを図る活動が必要である。指導計画の作成に当たっては、育成すべき「伝える能力」を具体的に設定した上で、言語の使用場面と働きを共通の柱として、2つの科目の指導内容を関連づけることも1つの方策であろう。

②「コミュニケーション英語Ⅰ～Ⅲ」では、総合的な4技能の育成を目指す

コミュニケーション英語Ⅰ～Ⅲは、今回行われた外国語科の科目再編において、その中心となる総合英語の科目である。現行の英語Ⅰ、Ⅱも目指すところは4技能の総合的な育成であり、学習指導要領の規定を見る限りでは両者の指導理念に大きな違いがあるとは考えられない。今回の改訂を機に総合英語の基本理念を再度確認し、指導計画を作成することが必要である。

指導の全体的な方針としては、コミュニケーション英語Ⅰでは、中学校での指導を踏まえ、4技能の基礎的なコミュニケーション能力を育成しつつ、複数の技能を有機的に関連づけた言語活動に発展させる。次に、コミュニケーション英語Ⅱでは、指導要領にあるような速読や精読、話し合いをもとに結論をまとめる、まとまりのある文章を書くなど、総合的なコミュニケーション能力の育成に繋がるような

言語活動を計画的に導入する。最後に、コミュニケーション英語Ⅲでは、「社会生活で活用できる」コミュニケーション能力の育成が目標となることから、多様な言語の使用場面や働きを扱いながら、社会生活での実践的なコミュニケーションに繋がるような言語活動を行うということになる。

③英語表現では、「伝える能力」の育成を主眼としつつ、「聞くこと」及び「読むこと」を関連づけた総合的な指導を行う

新設された英語表現Ⅰ及びⅡの指導に関して筆者が懸念するのは、指導内容において「書くこと」や文法の比重が重くなりすぎることはないかということである。科目の目標にある「伝える能力」とは、話したり、書いたりして伝える能力のことであるから、この2つの技能の扱いには適切なバランスが求められる。また、文法は、「コミュニケーションを支えるもの」という観点から指導事項の選択や扱いの軽重を工夫する必要がある。

「伝える能力」の育成に当たっては、段階を追って「簡潔に伝える」、「適切に伝える」、「受け手に応じて伝える」などの、伝え方の工夫をすることを指導上の課題とすることが考えられる。また、伝える前提として情報や意見を論理的に整理し、分析的に理解することが必要である。その意味では、聞き方、読み方の指導も視野に入れた総合的な指導も必要となるであろう。

④言語材料は、言語活動での活用を通じて実際のコミュニケーションで活用できることを目指す

コミュニケーション能力の基礎を形成するにはまとまった文法指導が必要である、という声は根強いものがある。それに対して、新しい学習指導要領では、文法を「言語活動と効果的に関連づけて指導する」ことを求めている。このためには、言語の使用場面と働きという言語活動の枠組みに応じて、扱う文法事項を精選することが必要である。

既に述べたように、今回の改訂でコミュニケーション英語Ⅰで文法事項をすべて扱うことになった。この結果、この科目での文法指導の比重がさらに増すことになると、総合英語としての性格が怪しくなる可能性もある。コミュニケーション英語Ⅰの文法指導では、文法項目の扱いに軽重をつけながら、基本的な内容を一通り押さえることを目標に置き、コミュニケーション英語Ⅱ、Ⅲと進むにつれて、

さらに活用を通じて内容を深めていくような指導方針が必要であろう。

語彙や連語に関しては、コミュニケーション能力の育成という観点からすると、学習指導要領の規定にあるように、「実際に活用できる」ことが必要である。そのためには、日常生活において使用頻度の高い語、句、連語などを優先的に取り上げ、繰り返し言語活動で活用することが大切である。語彙指導では、大量の英語にふれる中で意味や用法を理解させることが大切であり、その意味では、生徒の自学自習を促す指導も欠かせない。

指導内容の改善のために

新しい学習指導要領の実施に当たっては、指導計画の作成をこれまで以上に慎重に行うことが必要であろう。学習指導要領という「基準」に対して、実際に指導に当たる教師がどのように具体的な指導内容を構想するか、それを示すものが指導計画の作成ということであり、これこそが教師としての主体性や自律性の証ともいえる。

指導計画の作成に当たっては、その根幹となる学習指導で育成すべきコミュニケーション能力を具体的に設定しなければならない。その上で、到達目標として設定したコミュニケーション能力を育成するための指導内容、指導方法、教材、そして評価などを検討し、指導計画を作成することになる。しかし、このような到達目標の明確化とそれに基づく指導計画の作成ということは、日本の英語教育においてあまり真剣に議論されたことのない課題でもあるように思われる。新しい学習指導要領の実施を機に、学習指導に目的合理性を担保する意味からも、到達目標の明確化という課題に真剣に取り組むことを提案したい。

高校の英語教育で育成すべき基準となる（「すべての生徒が身につけるべき」という意味で、最低基準となる）コミュニケーション能力は、コミュニケーション英語Ⅰにある「基礎的な」コミュニケーション能力である。一方、「コミュニケーション英語Ⅲ」に示された「社会で活用できる」コミュニケーション能力は、高校3年間で育成するコミュニケーション能力の最大値といえる。学習指導に当たっては、「基礎的な」能力と「社会で活用できる」能力の間のどのレベルに到達目標を設定するのか、生徒の実態に応じた具体的な検討が必要であろう。



特集 「新教科書」— これからの英語教育

『CROWN English Communication I』の編集方針とその概要

慶應義塾大学 霜崎 實

はじめに

高校英語検定教科書の編集に携わって10年あまりになる。その間、少しでも完成度の高い教科書をつくるべく、さまざまな新しい試みを行ってきた。いわば、「理想の教科書」をイメージとして描きながら、その目標に向かって、議論や思考錯誤を通じてイメージを具体化してきた。

今回、学習指導要領の改訂に伴い、新たな「理想の教科書」を目指して編纂したのが『CROWN コミュニケーション英語 I』である。本稿では、編集上特に留意した学習指導要領改訂のポイントについて簡単に触れ、それに沿ってどのような教科書に生まれ変わったのかについて、できるだけ具体的に紹介したい。

「学習指導要領」改訂のポイント

今回の学習指導要領改訂の第一のポイントは、「質量面での格段の充実」が求められているという点である。これまでも「発展的な学習内容」として、全体の2割を目安として選択教材を導入することが可能であったが、今回の改訂によりこの上限規定が廃止され、同時に「教科書観」の見直しも要求されることになった。つまり、「教科書に記述されている内容は、すべて教えるものである」という教科書観から脱皮して、「個々の児童生徒の理解に応じた指導の充実」に資する教科書、「児童生徒の学ぶ意欲の向上に資する教科書」、「児童生徒の自学自習に資する教科書」といった教科書観への転換が求められているのである。このような教科書観の転換にともなって、現場においては「教科書を教える」という考え方から「教科書で教える」という考え方に移行することが求められることになる。

第二のポイントは、「コミュニケーション英語」と

いう科目名変更からもうかがえるように、「聞く、読む、話す、書く」の4技能を有機的に関連付けつつ、総合的なコミュニケーション能力の養成を目的とすることが明記されている点である。授業ではこれまで以上に英語によるコミュニケーション活動を充実させることが求められる。もちろん、すべての授業活動を英語で行うことが想定されているわけではない。たとえば、複雑な文法事項について英語で指導することまで求められているわけではないが、英語によるディスカッションや発表など、積極的なコミュニケーション活動への取り組みが推奨されることになる。

第三のポイントとしては、教育基本法の改訂にともない、伝統文化の尊重の精神を養うことが明記され、英語教科書においてもそれを反映した教材選択が求められることになった。具体的には、教育基本法第2条第5号に、「伝統と文化を尊重し、それらをはぐくんできた我が国と郷土を愛するとともに、他国を尊重し、国際社会の平和と発展に寄与する態度を養うこと」という点に配慮した教科書編集が求められることになったのである。

「学習指導要領」改訂を受けて

以上の改訂のポイントを考慮し、『CROWN コミュニケーション英語 I』の編集にあたって、以下のような基本方針に沿って編集を行うこととした。第一のポイントについては、現行版以上に選択教材を増やすことによって、「質量面での格段の充実」という要請に応えることとした。これによって、現場においては教科書の題材を選択的に扱うことが可能になり、結果として多様なニーズに応えることができるものとなった。

第二のポイントについては、4技能をバランスよく扱うことを追求する一方で、多様なテーマを取り

上げ、生徒の思考力や知的好奇心に訴えるような題材を厳選し、それをベースにさまざまなコミュニケーション活動を組み込むこととした。その意味で、いわゆる英会話教材とは一線を画すものであることは言うまでもない。

第三のポイントについては、海外の情報を受信するだけでなく、日本についての情報発信が求められている現在にあって、自らの文化や伝統について英語で発信する能力を養成することは、これまで以上に必要になってくる。こうした考え方にに基づき、後に触れるActivitiesやOptional Readingで、日本の伝統文化について適宜取り上げることとした。

題材のテーマと構成

本課で取り上げた題材のテーマは、科学・生き方・環境・言語・芸術・格差社会・遺跡発掘・動物の知性・平和・情報化社会の問題など、きわめて多岐にわたっている。具体的にテーマと概要を示したのが以下の表である。

本課は10レッスンから構成されている。このうち

『CROWN English Communication I』

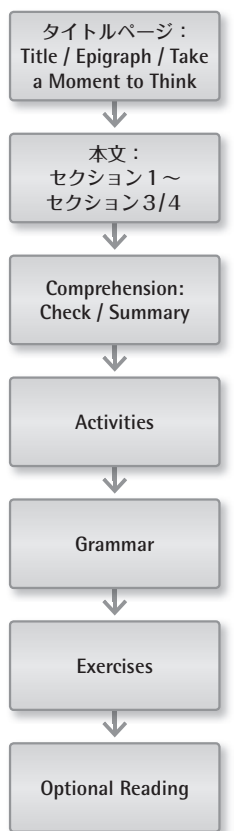
レッスン	タイトル	テーマと概要
Lesson 1	Going into Space	[科学・生き方] 若田光一氏が国際宇宙ステーションでの活動経験や宇宙開発の意味について語る。
Lesson 2	A Forest in the Sea	[環境問題] 東京湾のゴミの埋め立て地を緑化することによって、「海の森」を実現しようとするプロジェクトを紹介する。
Lesson 3	Writers without Borders	[言語・国際性] 言語や文化の境界線を越えて活躍する3人の女流作家の体験から、外国語を学ぶことについて考える。
Lesson 4	Playing by Ear	[音楽・若者の生き方] ピアニストとして活躍する辻井伸行氏の体験を通じて、音楽による感動について考える。
Lesson 5	Food Bank	[格差社会・NPO] 貧困に苦しむ人々に食料が行きわたる仕組みを作ったチャールズ・マクジルトン氏の活動を紹介する。
Reading 1	Wisdom of a Fool	[ユーモア] 中世のトルコに実在したとされるムラ・ナスルディン主人公とするユーモアに富んだ小説を読む。
Lesson 6*	Roots & Shoots	[環境教育・動物] ジェーン・グドール氏がチンパンジーの習性・人間との類似性・環境教育について語る。
Lesson 7	Diving into History	[歴史・遺跡発掘] アレクサンドリアの海底遺跡の発掘に成功した考古学者フランク・ゴディオ氏の考え方を紹介する。
Lesson 8*	Not So Long Ago	[平和・歴史] 20世紀を写真で振り返りつつ、戦争と平和について考える。
Lesson 9	Paddling a Log?	[情報化社会] 情報が氾濫するインターネット社会において、情報をどのように扱ったらよいのかについて考える。
Lesson 10*	Good Ol' Charlie Brown	[生き方・価値観] チャールズ・シュルツ氏の作品を通して、生きる上で何が大切かを考える。
Reading 2	The Luncheon	[ユーモア] サマーセット・モームのユーモアに富んだ古典的な短編を読む。
Optional Lesson	Two Dreamers, One Dream	[自由・平等・平和] キング牧師とオバマ大統領の自由・平等・平和についての考え方を紹介する。

各レッスンの流れ

各レッスンの流れは以下の図に示した通りである。

タイトルページでは、レッスンのテーマを端的に表現したエピグラフを用意した。また、Pre-reading活動のひとつとして、生徒の背景知識を活性化させる目的で、Take a Moment to Thinkを新設した。本課への導入を英語で行う際に活用していただきたい。

各レッスンの流れ



本文は650語程度から850語程度の英文で、各セクションが見開き2ページで構成され、合計4セクションからなる。傍注で慣用表現を取り上げ、脚注で新語リスト、慣用表現のパラフレーズや例文を挙げるほか、本文の理解を確認するための設問を設けた。さらに、各セクションの終わりには、リスニングによる内容理解の質問も用意した。

本文の末尾には、Food for Thoughtを新設した。これは、OECDによる国際学習到達度調査（PISA）における「読解力」を意識したもので、生徒が情報を取り出し、解釈し、本課を再読することで、より深い理解に到達するきっかけを提供したいと考えている。

Post-reading活動として、最初にComprehensionのセクションを設けた。Checkにおいては、multiple choice形式の内容把握問題を4題用意した。問題作成にあたっては、瑣末な問題は極力排し、内容の骨子に関係する問題に絞った。続いて穴埋め形式のSummaryを用意した。ここでは、単に穴埋めすることで活動が終わり、ということではなく、生徒独自に英文の要約を作成させ、その上で教科書の要約問題をさせることで要約の仕方を学ばせるような創意工夫も考えられる。

Activitiesでは、本文のテーマに関連した短いダイアログ（巻末に掲載）を聴かせた上で、内容把握、作文、口頭によるコミュニケーション活動を行うことができるように構成した。また、Optionにおいて英文の設問を設けたが、これはインターネットなどで情報検索を行い、さらに発展的な活動を行うことを期待している。

Grammarでは、そのレッスンで導入されている文法項目を2～3点取り上げ、簡単な解説と例文を提示した。また、今回新たに導入した試みとして、生徒が疑問を抱くようなポイントを取り上げたコラムを設けた。文法を単なる暗記の対象とするのではなく、理解して納得することが重要であるという認識に基づいたものである。

Exercisesでは、Grammarで学んだ文法項目の理解を確認し、適確な表現活動に結び付ける訓練をするための練習問題を用意した。穴埋め形式、語形変換、部分英作文問題、整序問題など、さまざまなバリエーションの問題を解かせることで、文法理解を深める指導に役立てていただきたい。

Optional Readingでは、本文のテーマに関連した内容を扱った300語から350語程度の英文を取り上げた。発展的内容を扱ったもので、本文の内容をより深く理解する助けとなるはずである。

ここで特筆すべきは、Lesson 1の“Message from Koichi Wakata”は、若田光一氏から寄稿していただいたものである。英文は高校1年生には若干難しいが、日本語訳を掲載することで、原稿をそのまま載せることにした。Lesson 6の“Message for High School Students”は、グドール氏から寄稿していただいたエッセイである。この場を借りて、両氏にお礼を申し上げたい。

「リーディング・スキル」と「音声」の指導

従来、リーディング・スキルについては、「英語Ⅰ」「英語Ⅱ」では扱っていなかったが、今回の改訂にあたり、「コミュニケーション英語Ⅰ」から導入するように方針を切り替えた。特に談話標識やパラグラフの構成についての知識は、読解のみならず、ライティングについても重要なことである。

また、音声指導については、Sound Studioというコーナーを設け、[1]音の連結・脱落・同化、[2]文の区切り、[3]強勢とリズム、[4]イントネーションに焦点を絞って、英語の音声の特徴について取り上げた。こちらも適宜、活用していただきたい。

おわりに

以上、『CROWN コミュニケーション英語Ⅰ』の編集方針とその概要について述べてきたが、どこまで目標とする「理想の教科書」に近づけたのだろうか。第一に、ゆとりのあるレイアウトを実現すると同時に、写真による視覚的な情報もより充実させることができた。第二に、テーマの多様性という点からも、Optional Readingを設けることにより、新たな選択教材を導入することができた。第三に、英語によるコミュニケーション活動についても、授業での活動の助けとなるようなさまざまな工夫を施した。一言で言えば、より進化した教科書を実現できたものと確信しているが、最終的には現場での活用を通じて初めて、「理想の教科書」が本当の意味で実現することになる。現場の先生方のご理解と創意工夫を切に望む次第である。



特集 「新教科書」— これからの英語教育

『MY WAY English Communication I』 の特長 — EXCEEDの「不易」をさらに強化 —

桜美林大学 森住 衛

はじめに

今回の学習指導要領改訂に際して、これまでのEXCEEDのシリーズは、新しくMY WAYのシリーズに生まれ変わりました。編集の方針は「不易流行」です。つまり、残すべき良き伝統は継承し、変えるべきは大胆に改訂するというものです。残すべきは題材です。特に、ことばに関する題材はEXCEEDの真骨頂でした。語彙と文法の指導の重点的扱いも継承します。大きく変えたのは教科書構成です。これまで本文はセクションを続けて表示する方式を採ってきましたが、今回は左に本文、右に活動という見開き構成にしました。現在の高校英語教育の現場ではこの方が指導しやすいという「声」を尊重しました。

本稿では、新版MY WAYの特長を「不易」の3つに絞って説明させていただきます。その3つとは、①興味深い題材の提供、②語彙と文法の増強、③Reading & Thinkingの充実です。「不易」としましたが、いずれも、これまでと同じではなく、さらに大きく進展させた内容にしています。

興味深い題材の提供

まず、本課でどのような題材を取り上げたかを順に概観します。

L.1 A Story about Names

〈姓+名〉か〈名+姓〉かの違い、英語圏、イタリヤ、モンゴルなどの例にみる氏名のいろいろ

L.2 Shoes for a Dream

高橋尚子さんがSmile Africa Projectを通してケニアの子どもたちに運動靴を送っている活動

L.3 Green Roofs

CO₂の削減や暑さ対策など省エネで屋上に芝生や木々を植えている建物

L.4 Pictures of Funny Moments

アメリカ人の写真家エリオット・アーウィットの瞬間の妙味をとらえた写真

L.5 Letters in the World

古代文字、英語のアルファベット、漢字、ハングルなど世界のさまざまな文字の由来

L.6 Great Abilities of Pigeons

ピカソとモネの絵を区別したり、スクランブル画を見分けたりするハトの意外な能力

L.7 The Power of Words

バラク・オバマ大統領の演説の例を通して、人を動かすことばの力

L.8 A Mysterious Object from the Past

紀元前にギリシャ沖の海で難破した船から見つかった「近代的な」機器

L.9 Sesame Street

世界140ヶ国で放映されている「セサミストリート」の理念：「多様性」と「平等」

L.10 A Lecture by Maskawa Toshihide

ノーベル物理学賞を受賞した益川敏英さんの「のりしろ」（心の自由さ）のある生活

この他に、各課の最後に〈Optional Reading〉として1セクション程度の教材を用意しました。すべて本課の題材と関連している話にしました。

L.1 Family Names in the World

いろいろな国の姓の数やその特徴

L.2 Africa in our Life

日本の日常生活とアフリカの深い関係

L.3 Masdar City

環境にやさしいアラブ首長国連邦の人工都市

L.4 Ume Kayo

一瞬を捉える若き写真家・梅佳代さん

L.5 Artful Letters

書道家・国重友美さんの「英漢字」

L.6 Learning to Survive

ニジマスにも性格の違いがある！

L.7 Audrey Hepburn

オードリー・ヘップバーンの珠玉のことば

L.8 What is This?

コロンビアの遺跡から出た不思議な金細工

L.9 Our Hero Doraemon

世界中で親しまれている「ドラえもん」

L.10 Reach for the Stars

宇宙飛行士・山崎直子さんの若き日の思い

この他、物語教材の〈Reading〉が1つあります。これは、‘The Girl in the Bank’という話ですが、銀行をのぞき込む二人の若者の描写からはじまり、最後が「おち」になっています。

以上がMY WAYの本課を中心とする読みもの教材ですが、これら21編の題材は300を超す素材から精選したものです。新版MY WAYの題材の特長は、話題の広がりや深さ、地域や時代の観点、老若男女の登場、内容硬軟の均衡などの多様さです。特に、知的・情的に興味を喚起する題材を心がけました。さらに、ことばに関する題材を意図的に多く取り上げました。「ことば」は、社会科や道德の題材と区別するためにも、英語教育が扱うべき話題です。この視点を明確に出しているのがMY WAYの題材の特長です。

語彙と文法の増強

言語材料のうち語彙と文法の増強をこれまで以上に打ち出しました。昔も今も、この2つがしっかりしていれば、受験の対策にもコミュニケーションの実践にも役立つからです。

まず、語彙に関してですが、ご承知のように、新学習指導要領では2つの大きな変更があります。1つは、中学で扱う語彙が900語から1,200語になったことです。したがって、これからの高校新入生は、これまでと比べると語彙力があると考えられます。しかし、高校の新学習指導要領が実施される2013年度では、このようなことはありません。中学が前年度(2012年度)から変わったばかりで、丸々3年が終わっていないからです。これにどう対処したらよいでしょうか。

もう1つは、今回の学習指導要領は、内容の扱いが「上限規定」から「下限規定」になったことです。語彙について当てはめると、これまでは高校では新語を「1,300語程度を扱う」となっていたのが、これからは「1,800語程度以上扱うこと」になります。つまり、語彙はこれまでよりも増強せよということですが、これは難題です。中学では、「週3」から「週4」になりました。しかし、高校では単位数が増える保証はありません。

そこで、せめて教科書での工夫が必要になります。現行のEXCEEDでは、〈Words〉というコラムを設けて、語彙増強を図ってきました。新版MY WAYではこのコラムを〈Vocabulary Building〉として残し、内容も充実させました。さらに、各課末に新しい〈Words〉を設け、ゲーム的な要素も入れた新規の活動を大幅に導入しています。

文法もこれまでのEXCEED以上に増強しました。最初の〈Starter〉で中学の基本的なことを押さえます。次に毎セクションの〈Grammar〉、そして、2課ごとに〈文法のまとめ〉、最後は付録の〈文法一覧〉です。取り上げ方の特徴は、新規の認知的な理解を目指していることです。たとえば、〈Starter〉では品詞の呼称まで説明しています。

- 人やものの名前を表す詞
- 名詞の代わりをする名詞
- 人やものの動作・状態を表す詞
- 人やものの形や容姿などを説明する詞
- 動詞・形容詞・副詞に副いて説明する詞
- 名詞の前に置く詞
- 文と文、語と語を接続する詞
- 発話の間に投げ入れて感嘆などを表す詞

- 自分だけでできることを示す動詞
- 他の人・ものを必要とする動詞

ここまで丁寧に文法を扱っている教科書は希有だと思えます。新学習指導要領では、基礎的なことの確認、自学自習できるような工夫を要求していますが、MY WAYはこれに応えています。

また、to-不定詞の説明に前置詞のtoから導入する、現在完了形のWe have walked for three hours. は文脈によって完了にも継続にも経験になるなど、斬新的で本質に迫る説明を試みています。

Reading & Thinking の充実

今回の学習指導要領の改訂で、科目名が変わりました。本誌で取り上げている「コミュニケーション英語Ⅰ」は、大雑把な見方をしますと、現行の「英語Ⅰ」にあたるものとみてよいでしょう。この科目は、4技能の扱うことになっていますが、これまでのEXCEEDも新版のMY WAYも、その中心をReading & Thinkingに置いています。その理由は3つあります。第1点はTEFLではReadingは他の技能の基礎になること、第2点は日本の英語教育環境ではReadingが最も効率がよいこと、第3点はThinkingを促すにはReadingが最適であることです。補足しますと、第1点はTESLやTENL(母語としての英語教育)と混同してはいけなからです。第2点は現在のクラスサイズ・授業時数・入試問題などの対応を考えるからです。第3点はThinkingを触発させるのは主として叙述文を扱うReadingだからです。

このReading中心の理念は、各セクション、各課のあとの言語活動に表れています。まず、各セクションの後では、内容理解を促す英語のQ&Aの他に、〈Read Again〉で本課本文の内容を確認しています。また、課の最後には、〈Comprehension〉として、課全体の本文に関するTrue or Falseや穴埋めの問題、さらに、その課で印象に残った段落を自分で選んで音読する活動も入れています。

この最後の活動は、自らthinkしないと答えられません。つまり、自律的な活動を促す工夫を取り入れています。また、音読を練習に入れているのは、ReadingにはReading ComprehensionとReading Aloudがあることを生徒に喚起するためです。音読という基本を忘れないでほしいという私たちの願いでもあります。

さらに、いわば「本格的」なThinkingの活動も取り上げました。〈Comprehension〉の最後にある[考えてみよう]です。たとえば、「世界の文字」を扱った第5課では、「今後、世界で新たなlettersが誕生する可能性はあるでしょうか。本文の内容にそって〈ある〉理由と〈ない〉理由の両方について考えてみましょう」としています。これはPISA型読解力の理念を応用したものです。このようなThinking Practiceを取り上げるのは、英語の教科書では今回が本邦初でしょう。

Readingの活動の極めて基本的な技術や対処法も扱っています。たとえば、〈Reading Skill〉です。新版MY WAYでは現行のEXCEEDよりもさらに「丁寧な」アプローチを試みています。たとえば、第1課と第3課では以下のような「スキル」を取り上げました。

[Reading Skill — 動詞と名詞]

第2段落7行目を読みながら、動詞を□で囲み、名詞に下線をつけましょう。

例：Do you say your given name first?

[Reading Skill — 主語と述語動詞]

第2段落5行目を読みながら、各文の主語を□で囲み、述部に下線をつけましょう。

例：Today the number of such buildings is increasing gradually.

この〈Reading Skill〉では、第9,10課でパラグラフフリーディングも取り上げています。でも、最初は、上のような確認から始めなければいけないのです。いわゆるslower learners はどれが名詞だか動詞かわからないからです。これまでの教科書ではこの種の手当を行っていなかったのです。

おわりに

以上、新版MY WAYの特長を、「興味深い題材」、「語彙と文法」、「Reading & Thinking」の3点から説明してきました。この3点は、各学校の環境や状況に応じて差はありますが、学校における英語教育として「すべての」高校生に保証したいと考えています。

なお、今回は紙幅の都合で取り上げなかったコラムなどがいくつかあります。たとえば、2課ごとに配置した〈Let's Try〉の[Dialog]の会話文や練習問題の例文の題材です。また、フォーニクスや発音、かぶせ音素を取り上げた〈Sounds〉です。さらに、〈Let's Try〉の[Starter]や[Dialog]で扱っているListening、課末の〈Self Expression〉で取り上げているWritingやSpeakingなどです。これらについては省略しましたが、見本本がみなさまのお手元に届いたときに、上記の3点と合わせて、ご検討いただければと願っています。



特集 「新教科書」— これからの英語教育

『VISTA English Communication I』の編集方針

昭和女子大学 金子朝子

新学習指導要領では、科目構成が再編され、現行の「英語 I, II」と「リーディング」は、「コミュニケーション英語 I, II, III」が引き継ぎ、4技能の総合的・統合的育成を図る。さらに「コミュニケーション英語基礎」が中学校の学習の定着を図る目的で新設された。また、現行では「オーラル・コミュニケーション I」(2単位)か「英語 I」(3単位)のどちらかの選択必修であるが、新学習指導要領では「コミュニケーション英語 I」(3単位) 1科目のみの必修となった。

VISTA English Communication Iは、以上のような改訂を受けて、必修の「コミュニケーション英語 I」の教科書として編集したものである。ここでは、新「VISTA I」の編集の基本方針と内容の特徴などについて述べてみたい。

(1) 編集の基本方針

新「VISTA I」は、VISTA創設以来の「英語の学習を通して、ことばと人間や社会との関係など、広くことばへの関心を高め、ことば・文化・民族の多様性とその共存、自然と人間の共生の大切さを学ぶ」教科書作りを、その基本方針としている。加えて、新学習指導要領では、中学校の学習の定着を図るために「コミュニケーション英語基礎」が新設されることを配慮して、その内容もカバーできるものとなるように留意した。

(2) VISTA I の特徴

① グローバルな視点

グローバルに世界の様々な文化を学ぶとともに、ローカルに自国や地域の文化を再発見して、地球とそこに住むものとの共存、共生を考える視点を大切にしている。新学習指導要領にもあるように、外国語のしくみやその言語の背景にある文化に対する理解を深めることは、日本語や日本の文化に対する理

解を深め、広い視野や国際感覚、国際協調の精神を備えた人材の育成にもつながるものである。

グローバルな視点を取り入れるために、題材の選択は最も重要である。VISTA Iの12レッスンの題材は、自然環境保護、(海外での)日本文化、(英語圏以外も含めた)世界の国々、社会貢献、夢の実現、自然界から学ぶ科学、ことばの力、などバラエティーに富み、しかも、生徒の興味、関心と呼ぶものを揃えている。

② 興味、関心と呼ぶ内容を「わかる」英語で

たとえ、英語に対して苦手意識があり興味が薄い生徒でも、教科書を「開いてみよう」と思い、読んでみたら「わかる」と思ってもらえる教科書、つまり、英語学習への動機付けを高める教科書作りを目指した。

そのポイントは、生徒に関心を持ってもらえる題材や話題性のあるテーマと、教科書の構成の工夫である。関心と呼びそうな情報をできるだけ簡単な英語で書き下ろした。どんなにすばらしい内容の教科書でも、どんなに上手に教える教師がいても、まず、生徒が開いてくれる教科書が必要である。「開く→見る→英語を読んでみる→わかる」の連鎖が起こるような教科書となっていることを期待している。

例えば、Lesson 4からの各レッスンの初めのページは、日本語での導入(英語版は指導書にサンプルがある)と、そのレッスンの内容を想像しやすいように大きな写真を載せたWARM UP!となっている。日本語でいくつか質問があり、写真にまつわるやさしい英語を聞いて解答する。各レッスンは3セクションに分かれ、セクションごとにreading pointが提示されている。また、1レッスンで扱う文法は1項目だけに絞ってある。本文中の新出文法にはマークを付け、本文の後の文法解説(STUDY IT!)が参照できる。さらに、各セクションには内容に関する

英語のQ&Aがそれぞれのページにあり、内容理解の手助けとなる。また、発音は今回から発音記号とカナ発音を併記することとした。一般の中学用の辞書では既にカナ発音は用いており、発音記号に馴染みのない生徒への配慮からである。

③ 基礎・基本の定着

中学校での指導内容との円滑な接続を希望する現場からの声は大きい。VISTA Iは、生徒の実態に応じ、「コミュニケーション英語基礎」もカバーできるように、特に文構造や文法事項について中学校の指導内容を再整理すること、また、高校からの新しい学習事項は繰り返しその要点を学習することができる構成とした。

中学校の基礎復習は、Part 1 (Lesson 1~3)で行う。Be動詞と一般動詞の現在形、及び、その否定、疑問文と、現在進行形、助動詞can, will、過去形を、本文との見開きで学ぶことができる。すべての基礎となるこれらの事項を、ここでしっかり押さえてもらう。

Lesson 4以降では、前のレッスンの新出文法は次のレッスンで必ず繰り返すように配慮してある。これまでの教科書は、ある文法事項を一度学ぶと、その後全く使われなかったり、忘れた頃に出てきたりすることが多かった。VISTA Iでは、同じ文法事項を次のレッスンの違うコンテキストの中で繰り返し用いることで、生徒から「前のレッスンで勉強したな」という気づきを促したいと考えている。

④ コミュニケーション能力の育成

新学習指導要領の改善事項の一つは、生徒が英語に触れる機会を充実する方針にある。多様な場面における言語活動を経験させながら、「聞く」「話す」「読む」「書く」の4技能を有機的に関連付け、総合的にコミュニケーション能力を育成することが唱えられている。

VISTA Iでは、より豊富な英語のインプット、インタラクション、アウトプットの機会を作るように配慮した。インプットとして「聞く」機会を豊富にするために、各レッスンの導入のWARM UP!ではやさしい英語のイントロがあり、本文の後のPRACTICE!でも必ず新出の文法事項をターゲットとしたリスニング問題を配置した。また、「読む」インプットとして、Reading Skillのコーナーを置き、英文を正確に読むコツを学ぶ。インタラクションの

機会としては、本文の各セクションにあるQ&Aを使って、教師と生徒間や生徒同士で、英語でのコミュニケーションが可能である。PRACTICE!には、必ず英語で情報交換を行う練習がある。さらに、ENJOY COMMUNICATION!のコーナーでは、英語を使用する場面を想定して、その場面でよく用いられる表現を中心に会話をする。生徒の実態に応じて、4技能を組み合わせて活用して欲しい。アウトプットの機会としては、「話す」ことは、インタラクションで補うことができるので、特にやさしい英語で「書く」機会を増やした。まず、各レッスンの後にTHINK!のセクションを置いた。ここでは、本文の内容を統合的に考えてもらうPISA型の問題に答え、それに基づいて、本文の内容を英語でまとめる穴埋めを行う。英語でアウトプットを行うためには、話したり、書いたりするためのアイデアが必要である。単に本文の一部をコピーして穴埋めをするのではなく、本文全体で一体何を言いたいのかを掴んでから、英語でまとめを行うという趣旨である。また、USE ENGLISH!のセクションをレッスンごとに置き、説明する時の表現、褒める場合の表現など、言語の機能に配慮しながら、それぞれのレッスンの内容に関連した事柄について、英語で話したり、書いたりする機会としている。

(3) 文法の扱い

前項(2)③の「基礎・基本の定着」で述べた通り、VISTA Iでは、中学校で学習した文法事項の基礎復習・確認のためにLesson 1~3を準備しているが、これに加えて、本文に入る前に「ののちゃんの英文法—基礎を学習しよう—」を掲載した。ここでは、主語、be動詞、一般動詞、目的語、形容詞、副詞、前置詞、冠詞を取り上げ、文法の基礎の基礎を復習する。高校では、中学で学んだ5つの文の構造をさらに展開して、より複雑な文構造を学ぶことになるが、「ののちゃんの英文法」のねらいは、文を構成する1つ1つの要素についてもう一度確認することにある。生徒の理解の程度に合わせて活用してもらいたい。

Lesson 1~3は、中学の文法の復習が大きな目的である。さて、今回の改定では「コミュニケーション英語 I」がすべての生徒の必修となり、学習指導要領にある8項目の「文法事項」のすべてを「コミュ

コミュニケーション英語Ⅰ」で取り扱うことになっている。つまりVISTAⅠでは、Lesson 4～12で不定詞の用法、関係代名詞の用法、助動詞の用法、代名詞のうちitが名詞用法の句および節を指すもの、動詞の時制などについて、中学校で学習した基礎に加えてより幅広く学び、さらに、高校で初出の関係副詞の用法、仮定法、分詞構文も学ぶことになる。

VISTAⅠでは、できるだけ運用度が高い文構造や文法事項をまずSTUDY IT!で確認したあと、PRACTICE!で言語活動を行いながら学べるように工夫した。高等学校で初めて出会う文法事項については、使用が典型的である例にのみ焦点を絞って指導することとしている。

(4) 語彙の増加

VISTAは、生徒にわかりやすい英語を目指すため、これまでは語彙数もある程度制限した編集とされていた。しかし、今回の学習指導要領の改訂で、中学で学ぶ語彙が300語も増えた影響は大きい。「コミュニケーション英語Ⅰ」では400語、Ⅱ、Ⅲでは各700語が新出となり、中学と高校を合わせて、これまでの2,200語から一気に3,000語を学ばなければならない。中学に上乘せる語彙数は400語で現行と変わらないが、実は中学での履修語彙がすでに300語増えているので、「コミュニケーション英語Ⅰ」で用いる語彙レベルはどうしても高くなる。

新VISTAⅠでは、本文の各ページの語彙数は、人の短期記憶が7±2であることを考慮して、多くても9語までに抑えた。そのために400語の上乗せをこなすのはかなり難しい。速読用の読み物としてThe Little Princeをやさしく書き直したENJOY READING!や、楽しんで英語に触れてもらうためのTake a Break!、巻末のUSE ENGLISH!表現集にも新語が加えられている。

巻末の「WORD LIST」には語彙学習のための工夫がある。辞書を教室に持参しない生徒が多くなり、現場からの強い要望を受けて、簡単な辞書の機能も持たせた。生徒が学んだ語彙をチェックするのに便利なように、四角い枠のマークも付した。語彙リストも活用して、新しい語彙を積極的に言語活動に使って欲しいと考えている。

(5) 英語で授業

「英語で授業を行うことを基本とする」とは、教師が英語で授業を行うとともに、生徒も授業の中でできるだけ英語を使用することによって、英語による言語活動を授業の中心とすることを意味している。しかし、生徒の理解の程度に応じた英語で授業を行う配慮は重要である。生徒の理解度を把握して、簡単な英語を用いたり、ゆっくりと話したり、繰り返したりして、生徒が英語の使用に慣れるように指導をしていきたい。また、この規定は、英語で授業を行うことの重要性を強調するもので、授業のすべてを必ず英語で行わなければならない、ということではないことも確認しておきたい。

小学校5年生から「英語活動」を通して英語に慣れ親しみ、中学での言語活動を中心とした英語の授業を受け、高校に生徒が入学するのは、2016年のことになる。それまでに、生徒のレベルに応じて、少しずつ英語での指導の割合を増やしていくようにしたい。

授業中の教師の発話は大きく分けると、社会的目的で使うもの、授業運営の目的で使うもの、授業の内容に係わる中心的な目的で使うものに分類される。ひとつの提案としてまずは、社会的目的を持つ、授業の始めと終わりの挨拶や生徒との個人的な話のやり取り、そして、授業運営の目的で使う“Please open to page 10.”などのやり取りから英語を使う機会を増やしてはどうだろうか。新VISTAⅠでは、Get Ready!と題した教科書の本文に入る前のPre-Taskの1つとして、教師や生徒が授業で使う英語の表現集を掲載している。手始めに、ぜひここを活用して欲しい。

このように新VISTAⅠは、生徒が英語の基礎・基本を確実に身に付け、それらを活用しながら学習を進められるように、また、生徒の理解の程度に応じて、補充的な学習や、発展的な学習もできるように配慮して編集した。ぜひ、多くの先生方や生徒たちに活用していただけることを祈ってやまない。



特集 「新教科書」— これからの英語教育

『CROWN English Expression I』の編集にあたって

電気通信大学 松原好次

はじめに

『クラウン英語表現Ⅰ』(Crown English Expression I)の編集作業が終盤にさしかかったころ、3・11の大震災が日本を襲いました。その直後から様々な職業の人々が被災地に足を運び、救援にあたりました。その報道に接するたび、「英語の教員として一体、何ができるのだろうか」と悶々としていました。そのようなとき、たまたまツイッター上で朝鮮人・中国人に対するデマを目にしたのです。「ドロボー、放火、性犯罪に注意せよ」というものでした。私は考え込んでしまいました。“これでは関東大震災直後に広まった流言飛語と同じではないか。15円50銭の発音を強いられた語頭の濁音がうまく出せなかったため、朝鮮人をはじめとした言語的・文化的マイノリティが暴力の対象になった100年前と変わりがいいではないか…”

一方、阪神・淡路大震災や新潟中越沖地震をきっかけに、災害弱者に対するスムーズな情報提供を心がけてきた自治体やNGOが、今回の震災発生時、すみやかな対応をしました。大震災から3か月ほど経過後、私のなかで一つの考えが固まってきました。「異言語・異文化に対して開かれた心を学習者が持てるよう、平時において地道に、しかも明示的に指導していくことが私たち外国語教育に携わる者の務めだ」という考えです。この考えが編集作業の後半段階で、私の頭のなかを駆けめぐっていました。

編集の基本方針

新学習指導要領・英語表現Ⅰの目標に即して以下の2点を編集の基本方針としました。

(1) 生徒たちの“内向き志向”を切り崩すため、世界各地に住む人々の生活や文化を可能な限り紹介する。

冒頭で述べたとおり、学習者が極限状況で異言語や異文化に対する拒絶反応を示すことがないように、平時において、他の国・地域に暮らす人々に関心を抱き、異質な事物を正しく理解できるよう導くことが大切だと考えます。そのためにも、自国の事物を正確に理解できるよう導く必要があります。日本の地理・歴史、文化、産業・技術を本課のタイトルとしたゆえんです。さらに、最初のレッスンを「世界にはばたく日本人」と題したのは、生徒たちが身近なことから出発して外の世界に目を向けるようになることを願っているからです。グローバル化した世界のなかで、自他の文化を双方向的に理解しようとして初めて、「積極的にコミュニケーションを図ろうとする」意欲が湧き出てくるものと考えます。英語教育の目標を「グローバル・シティズンシップの養成」に置く考えがありますが、『クラウン英語表現Ⅰ』編集の基本方針もそこにあると言えます。

(2) “背骨の通った英語”を身につけさせるため、文法を真正面から取りあげる。

本課レッスン1の直前に、中学校から高校への橋渡しともいえるべきG-moduleを配しました。そのねらいは、「英語の構造を正確に把握したうえで表現活動に移ることが大切である」という視点を明示するためです。母語(ENL)あるいは第二言語(ESL)としてではなく、外国語(EFL)として英語を学ぶ以上、言語の仕組みを意識的に把握する必要があるからです。長い海外勤務歴をもつ私の同僚や友人は、「外国語学習のある段階で、“きちんとした英語”を身につけておかななくてははいけない」と声を合わせて言います。「事実や意見などを多様な観点から考察し、論理の展開や表現の方法を工夫しながら情報や考えを伝える」ためには、高校段階で英語の文法を体系的に習得しておかななくてはならないというわ

けです。Crown English Expression I は、文型・時制から仮定法まで文法の基礎的事項をほぼ網羅するように編集してあります。続編の Crown English Expression II を応用編として位置づける方針です。

題材選択の基準

以下の2点を基準として題材を選択しました。

(1) 編集方針 (1) に則って、可能な限り世界各地の文化・風俗習慣・言語・科学技術・自然・地理・歴史等に題材を求めると同時に、日本の事物についても英語で表現する際に必要となるであろう題材を選ぶ。

本課で取りあげた世界各国関連の題材としては、「ブータンの高校生」、「オランダの画家・フェルメール」、「リオのカーニバル」、「北アフリカのタジン料理」です。Speakingの課には、世界遺産としてアブシンベル、黄龍、マチュピチュ、サグラダ・ファミリアを選びました。また、解説や設問の部分にも、世界各地に関わる例文を取りあげました。たとえば異文化理解の視点から、イスラム文化圏のラマダンに触れるとともに、トムヤムクン、ブルコギなどを意識的に挿入しました。言語事情としては、中東・北アフリカのアラビア語、ロスアンゼルススペイン語、ケニアのスワヒリ語、エスペラント、ポルトガル語などの言語名に言及しました。科学技術の側面からはホーキングやアインシュタインなどの人名を載せてあります。美術・建築関係では、ガウディ、ル・コルビュジエを取りあげました。自然・地理・歴史としては、ナイアガラの滝、自由の女神像、天安門広場、アンコールワットなどを例文のなかに入れてあります。

一方、日本については、知床の語源としてのアイヌ語、漫画の神様・手塚治虫、リニア中央新幹線、地雷除去ロボットなどを本課の題材として選択しました。Speakingの課(Cool Japan)には、回転ずし、100円ショップ、洗浄機付きトイレなどが出てきます。言語事情の観点から、言語的マイノリティとしての日系ブラジル人も意識的に例文のなかで配してあります。また、祇園祭や能などの伝統文化に関わる語句とともに、食文化(牛丼・即席めん)や科学技術関係(ロボコン・LED・太陽電池・電気自動車・電子書籍)の語句も取りあげています。

(2) 編集方針 (2) に則った文法学習は、ややもすると味気ないものになりがちなので、好奇心を出発点として言語の学習に取り組めるよう、「生徒が飛びつきたくなくなるトピックであり、しかも芯のある題材」を選ぶ。

克己心をもって前進しようとするスポーツ選手として、車椅子テニスの国枝慎吾とフィギュアスケートの浅田真央を取りあげました。エクストリーム・アイロニング、カバディなどの珍しいスポーツも紹介してあります。環境保護の観点から、北極のシロクマ、瀬戸内海のカブトガニ、小笠原諸島のウミガメ、沖縄のジュゴンを題材として選びました。宇宙関係では本課レッスン1の若田光一をはじめとして、小惑星探査機・はやぶさなどを取りあげました。その他にも、ロゼッタストーン、MSF(国境なき医師団)、『沈黙の春』などを本課あるいはSpeakingの題材として選び、写真とともに紹介してあります。さらに例文として、絶滅危惧種としてのメダカ、町工場、『1Q84』など、生徒の興味をかきたて、しかも考えさせる語句に言及しました。

構成の基準

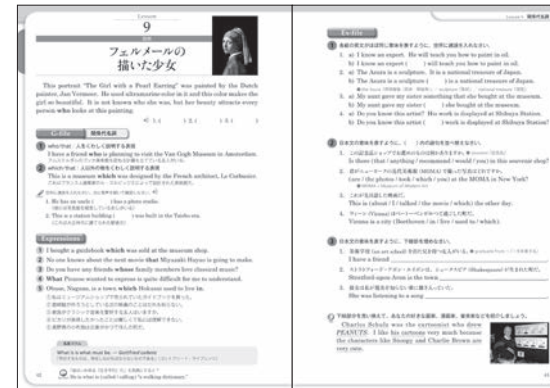
英語による表現活動に至るまでのプロセスを重視して、以下2点を教科書構成の規準としました。

(1) 本課16レッスン、Speaking 8レッスン、Grammar Profile 8編(解説編4・問題編4)の3部構成とする。

- a. 「文法は表現にとっての地下水脈である」という視点から、本課全体にわたって、主要な文法事項の基本部分を分かりやすい例文とともに提示しました。特筆すべきは、例文や練習問題が文法面だけでなくテーマ面でも統一されていることです。
- b. Speakingの8レッスンでは「発表に必要な表現」(「聴衆を引きつける」など)と「つなぎ言葉」(「時間的順序を示す」など)に焦点を当てて、スピーチやプレゼンテーションに取り組む際の基本表現を提示するとともに、使用場面・発表内容に合わせた到達目標を具体的に明示しています。
- c. Grammar Profileの解説編には、英語で表現する際に役立つ「日本語と英語の発想のちがいを」取りあげた後、確認のための問題を付してあります。問題編は、直前の4レッスンで扱った文法項目を定着させるための復習として用意しました。

(2) 編集方針 (2) に則り、主要な文法事項や「発表に必要な表現」を確認して定着を図ったのち、英語による表現へ移行する。

a. 本課の流れ



見開きの左ページ最上段には、写真の人物・事物の紹介文(60~70語程度)を載せました。授業の導入がスムーズにいくように、Listening ComprehensionのT/F問題を3つ用意してあります。その下にG-file(文法項目の簡潔な説明)、CHECK(確認のための問題)、Expressions(さらなる例文)、名言コラム、One Point(日本人の英語学習者が誤りやすいポイントに焦点を当てた正誤問題)が続きます。右ページには、Ex-file(空所補充、語句整序、部分英訳の問題)の後にTry(各課の題材と文法項目を使い、自分の意見を書いたり話したりするコーナー)が続きます。このコーナーでは、写真と例文を参考に自由作文をしたり、ペアでの会話をしたりして、コミュニケーション活動のなかで様々な表現の定着を図ります。

b. Speakingの流れ

見開きの左ページ最上段に配したInputでは、各課の題材に関する情報をリスニングまたはリーディングで受信します。Inputで得た情報を、右ページ最上段のInfo Depotに空所補充形式で一時的に保管します。その情報をOutputに補充すると、Eメール・エッセイ・スピーチなどの原稿が完成し、場面・目的に応じたOutput各種の構成を確認できる仕組みになっています。最後にTryで、各課の題材に基づき、「導入」「本論・展開」「結び」といったスピーチの構成を問題形式で再確認することになります。この際、「発表に必要な表現」と「つなぎ言葉」を活用することによって、「情報や意見を論理的にまとめる力」の養成ができます。また音声面では、

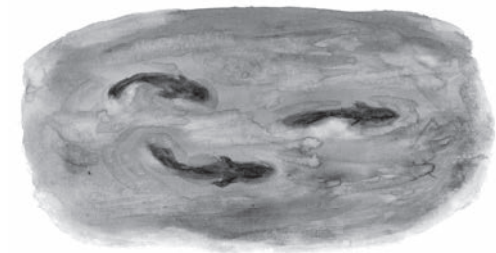
Sounds(「音の連結」「強勢とリズム」「文の区切り」「感情を入れて読む」)を参考にすることができます。Tryは、生徒が無理なくスピーチに挑戦できるよう工夫してあるため、「自分の考えをまとめ、適切に伝える能力」を徐々に高めていくことができます。

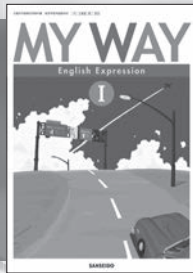
c. Grammar Profileの流れ

解説編には「動作動詞と状態動詞」「自動詞と他動詞」「冠詞」「名詞の□と□の区別」「日英語の意味のズレ」「くだけた表現・ていねいな表現」「主語の選び方」などについての解説をクイズとともに載せてあります。問題編は、空所補充・語句整序・部分英訳・全体英訳の問題とColumnから成り立っています。Columnは「過去形と現在完了形」「不定詞と動名詞」「直説法と仮定法」など、英語で表現する際に間違いやすいポイントの解説コラムです。

おわりに

“Art is long, life is short.”という成句の意味を吟味する必要があると思います。「技(わざ)を修得するには長い時間がかかる。それに比べ、人生は何とはやく過ぎ去っていくものか」という意味でしょうが、基本の徹底がいかに重要であることを示しています。この成句は医療やスポーツや音楽だけでなく外国語学習にも当てはまります。基本(異言語・異文化に対する寛容心および目標言語の構造)を身につけておけば、将来、学習者一人ひとりが自分の仕事などで外国語の使用を迫られたとき、その基本を活かし、頻りに練習・使用することによってコミュニケーション能力を高めることができるはずで、外国語の修得はたやすくできるものではないこと、そして、高校においては苦しいかもしれないが基本を自分の身体に叩き込む必要があること——この2点を地道に、しかも明示的に伝えていただきたいと考えています。『クラウン英語表現I』は、中学・高校の教員が中心となって編集しましたので、先生方のニーズに合致した教科書ができたのではないかと自負しております。ご一読いただけたら幸いです。





特集 「新教科書」— これからの英語教育

『MY WAY English Expression I』の 編集方針と内容紹介

—英語のしくみを学び、
論理的な表現力を養う—

同志社女子大学 飯田 毅

はじめに

昨今の経済におけるグローバル化の影響を受け、これからの世代を担う多くの高校生たちは今後ますます英語を使ってコミュニケーションをする機会が増えてきます。そのような時代背景の中で、「英語表現 I」の教科書である My Way English Expression I (以下、My Way) の目標は、生徒一人ひとりが言語能力と言語感覚を磨き、明確な論理展開の方法と表現力を培い、将来、諸外国の人々とコミュニケーションが取れ、ひいては親密な人間関係を築いていける態度を育成することにあります。

今回の新学習指導要領では、一段と生徒のコミュニケーション能力と態度の育成が強調され、新たに「英語表現」という科目が生まれました。My Way では、その趣旨を最大限に活かし、高校の現場で先生や生徒が何よりも使いやすいことを念頭に置き、生徒が基礎から英語が学べ、論理的な表現力を身につけ、文化や言語に気づきながら、総合的な言語活動に至る教科書作りを目指しました。

英語のしくみを理解して、論理的に表現する

「私の高校では、学習指導要領にあるような総合的な言語活動ができない」とよく言われるのを聞きます。実際、私自身中学の教師をしていた時に同じようなことを感じていました。しかし、私自身の試みが私の考えを変えました。それは、20数年前の研究授業で、日本の中学3年生がオーストラリアの同じ中学3年生に国際電話をかける、という実践を行ったことです。当時はインターネットや携帯電話などない時代、いわゆるダイヤル式の黒電話の時代です。この授業を実施するために、事前に綿密な計画を立て、教室内の生徒全員が会話の内容が聞こえるようにしました。その結果、当日生徒はオーストラ

リアの生徒とお互いに質問し合うことで、理解し合い、ささやかではありましたが、心のこもった交流ができました。この実践から私は、生徒の到達すべき目標を明確にし、段階を踏まえて、系統的な指導をすることで、中学生でも総合的な言語活動ができることを実感しました。しかし、このような活動はとすると「電話で質問し、答える」という活動だけに焦点が当たってしまいます。つまり、その活動だけに必要な文法事項、文型、語彙だけを学ぶというきらいがあります。高校の英語では、ただ単にコミュニケーション活動を行うだけでは不十分です。高校時代は、中学の基礎に基づき、英語でより高度なコミュニケーションができるための文法・文型や語彙の知識を同時に身につける時期でもあります。特に言葉のしくみの基本である文法・文型に関しては、ぜひ高校時代に身につけておきたいものです。また、高校時代は社会性や論理性を身につけられる時期です。そのために、本教科書では、題材に配慮し、文化や言語に対する気づきや論理性を身につけられるようにしました。では、本教科書の特徴を7項目に分けて述べてみましょう。

(1) 英語のしくみを学び、speakingとwriting活動に導く

前述したように、My Wayでは英語のしくみである文法・文型を重視します。しかし、英語のしくみだけでなく、最終的には実際に生徒が教室で表現活動ができることに狙いがあります。では、なぜ言葉のしくみから学んでいく必要があるのでしょうか。日本でも最近はいまージョン式英語教育といって、目標言語である英語そのものを学ぶのではなく、目標言語を使って教科を学ぶ学校が増えています。いまージョン式英語教育は、英語を使用するという点では非常に有効です。しかしながら、とすると英

語を正しく使うという点では、問題があることが分かっています。実際、最近の第二言語習得理論でも、例えば、Focus on formに見られるように、意味を重視しながら形式である文法・文型をどのように教えるのかということに研究の焦点が移っています。このような状況の中で、日本の普通の高校生が英語を身につけていくためには、今までのようにただ単に文法を理解するだけではなく、理解した上で、それを生徒の身近な場面に置き換えて実際に使うという視点が重要です。そこで、My Wayの本課である毎回のLessonでは、文法・文型をLearn!の所で学び、Practice!で練習し、Use!で自己表現活動を行います。そして、活動の最終段階に、総合的な言語活動であるProject Workを取り入れました。

(2) 文法シラバスをコミュニケーションに活かす

Communicative Approachが導入された頃、文法シラバスが変わって、Notional Functional (概念・機能) シラバスが提唱されました。確かに英語教育史上では、画期的な出来事でした。しかし、概念・機能シラバスが文法・文型と必ずしも明確な対応がないこと、英語の文法大系が日本語の文法大系とかなり距離があることから、日本の高校生にとっては必ずしもそれが良いとは限りません。むしろ、日本語とは異なる言語体系を持った英語の文法事項をまとめて学習した後に、コミュニケーション活動をする方が能率的であると言えます。そこでMy Wayでは、5つのUnitからなる文法事項のまとまりを作り、その中で体系的かつ意味を重視した指導ができるように工夫しました。例えば、Unit 1では、日本語と大きく異なる「英語の時制」を扱い、中学校で学んだ時制を含めて英語の基礎的・基本的な時制を学びます。Unit 2では、助動詞を話者の心的表現と捉えます。また、受動態の形式だけを指導するのではなく、受動態が使われる際に重要である「話し手の視点」という観点から取り扱います。つまり、一つの出来事を表現する際に、話し手が何を主語にするかによって文が能動態になったり、受動態になったりすることです。また、それぞれのUnit終了後には、Unitで扱った文法を復習します。さらに、生徒の文法に関する意識を高めるために、英語のしくみとコミュニケーションを結びつけたGrammar for Communicationというコラムを設けています。

(3) 中学校と高校の橋渡し

小学校の英語教育が始まり、小・中との連携の重要性が言われていますが、中学と高校の連携も古くて新しい問題です。私自身、高校生になった時に、高校の英語の授業に戸惑ったことがあります。その最も典型的な例は、基本的な文法用語を知らないことから起こる問題です。高校の先生が何気なく使っている文法用語がわからず、英語が急に難しくなったと感じる高校1年生が多いからです。文法用語の知識と英語力の間には何も関係がありません。文法用語は、本来英語のしくみを理解する際に便利な言葉です。その便利な言葉が生徒の理解の障害になる場合があります。そこでMy Wayでは、教科書の本課の前に、Get ready!という復習のページを設けて、英語の文法の基礎を身につけると同時に基本的な文法用語を理解できるようにしました。その中には、例えば、高校生にとっては難しく感じる英語の冠詞の用法の基本が、名詞の単数・複数とともに解説されています。またMy Wayでは、生徒が目的を持って文法事項が学べるように、Unitの最初はその中で扱う文法事項の要点をわかりやすく図にまとめ、Unit内で扱う文法項目間の関係もできる限り関連づけられるように示してあります。

(4) Lessonに含まれる様々な活動

それでは、見開き2ページになっている1つのLessonについて、少し詳しく述べてみましょう。生徒は、写真を見て正しい英文を選ぶlisteningの活動から入ります。次に、Learn!の段階では、目標となる文法項目の2つの基本文とそれに関連する例文が、簡潔でわかりやすい解説とともに示されています。例文は、該当する文法項目から高校生にとって必要とされるものを選び、Lessonのテーマに沿ったわかりやすい英文にしました。次に、目標となる文法項目の理解度を確かめる簡単なCheckがあります。ここまでき見開きの左側のページです。右側のページは、練習問題であるPractice!と、目標となる文法項目を使って生徒自身が文を書き、話す活動を行うUse!です。練習問題といっても機械的な練習ではなく、意味を考えた練習問題が含まれています。例えば、Grammar in Useでは、目標となる文法事項を使った50 words程度のまとまった文章があり、英語を聞いて、空所を補充するdictationの活動

と全体を通して音読する活動が含まれています。また、生徒の理解を助けるために、右側にその文章に関する日本語のOutlineが示されています。Exercisesでは、目標文法事項に関する練習問題が易から難へと配列されています。そして、最後にUse!があり、ここで生徒は、目標文法項目を使って、自分の考えや経験したことなどを英語で書き、話す自己表現活動を行います。

(5) 題材や例文から文化や言語に対する気づきを促す

文法の参考書にはあらゆる文法・文型と詳しい説明が書かれていますが、欠点として、生徒が表現したい一貫したテーマに基づいては書かれていません。My Wayでは、それぞれの課ごとに、ゆるやかに統一されたテーマがあります。例えば、Lesson 8の見出しは「興福寺の阿修羅像」となっています。全体が阿修羅像の話ではなく、日本の伝統文化を扱いながら、Grammar in Useでは阿修羅像がテーマになっているのです。また、練習問題には「江戸時代には梅の花が好まれていた」、「アイヌ語はかつて北海道で多くの人々に話されていた」というような伝統文化や言語に対して、生徒の気づきを促すような例文も多く含まれています。

(6) 論理性を養う3文writing

Unitの最後には、全体をまとめた文法問題とともに、Write a Paragraph!という活動が設けられています。この活動の目的は、Use!で行ってきた1文の英作文を3文のparagraphにすることです。最小のparagraphではありますが、生徒は「導入」「展開」「結論」という指示に従って、文と文との論理関係を理解しながら、英語で文章を書いていくこととなります。本格的なparagraph writingについては、My Way English Expression IIで扱うこととなりますので、ここではその基礎と基本的論理関係を学びます。大学生でも文と文の関係を意識しないで英語の文章を書く学生が多いことから、この段階から文と文との論理関係を考えさせることが大切です。

(7) 総合的な言語活動 (Project Work)

Project Workは、それぞれのUnitの最後に全体で5つ用意されています。この活動の目的は、生徒の

総合的な言語活動です。例えば、Project Work Eでは、ペットについてのspeechをします。その際に、モデルとなるspeechに関して聞き取り、要点を読み取ることが第1段階です。次に、モデルを基に異なった立場からspeechを組み立てていきます。まず、与えられた中から理由を2つ選び、また自分で理由を1つ考えます。次に、それらを基にspeech全体の構成である「あいさつ」「主張」「つなぎの表現と理由1」「つなぎの表現と理由2」「つなぎの表現とあなたの理由」「結論と終わりのあいさつ」と書かれた表を整理していきます。この構成表は、文と文の関係を考えさせながら書かせるためのものです。すなわち、生徒に論理性を身につけさせるものです。このようにして、生徒は論理的表現について注意しながらspeechを書き、最終段階として発表します。ここで重要な点は、speechをする際に書くプロセスを重視していることです。また、話す際に注意すべき点として、Tips for Speakingというコーナーが設けられ、話す際の発話・態度にも注意を促しています。

英語で行う授業

最後に「英語で行う授業」に関して簡単に述べておきます。本教科書を使って、英語で授業を行うことは可能です。しかし、英語で授業を行うことが目標ではなく、それは生徒のコミュニケーション能力を育成するための一つの手段です。本教科書の文法解説は、学習指導要領の解説にもあるように日本語で行うべきです。最近のBilingual教育でも、目標言語である英語で授業を行う中で、母語である日本語をどのように効果的に使っていくかが課題になっています。ぜひ、My Wayを手にとってご覧ください。



特集 「新教科書」— これからの英語教育

『SELECT English Conversation』の編集方針と内容

拓殖大学 北出 亮

新教科書の編集方針

新教科書『セレクト英語会話』の学習指導要領における目標は「英語を通じて、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成するとともに、身近な話題について会話する能力をやしなう。」となっており、平成19年度に改訂された現在のオーラルコミュニケーションⅠの学習指導要領と内容は基本的にはほとんど変わっておりません。科目名は「Oral CommunicationⅠ」から「英語会話」となりましたが、テーマ・題材、言語活動の扱い、文法の扱い、英語での授業は現行と同じ扱いです。従って、新教科書の「英語会話」は現行『SELECT Oral CommunicationⅠ』の編集方針を踏襲致します。

今回の『セレクト英語会話』は1996年初版の『SELECT Oral Communication A』の流れを受け継いだ教科書です。この間、『セレクト』の基本コンセプトとして長年教育現場で大きなご支持を頂いてきた「Key Expression方式」「5段階ステップ式」「コミュニケーション活動」「ワークシート」などの指導法を完全に受け継ぎました。今回の『セレクト英語会話』でも、「授業が進めやすく、教えやすい」「楽しく学べて力がつく」「基本表現を繰り返し段階的に学ぶので、授業がしやすく達成感がある」「教材が充実していて評価がしやすい」という基本的な編集方針にさらに磨きをかけて編集致しました。

追加項目とその対応

新学習指導要領には、現行にない追加項目「海外での生活に必要な基本的な表現を使って、会話する」がありますので、その対応が新しく追加する内容になります。

海外での生活というと、高校生にとっては「留学」が一番可能性が高いと思われます。そこで新教科書

では東西高校の生徒として新に亜紀と拓を登場させ、アメリカへ留学させる「亜紀と拓の留学日記」の物語を作りました。また前見返しは空港の到着ゲートの場面、後ろ見返しはお別れパーティの場面として使用しましたので、アメリカ入国からホストファミリーとの生活、学校での勉強、休日の観光、そして帰国のためのお別れパーティまで留学全体の流れがわかるように致しました。

基本的な会話表現は、イラストで面白く描かれた留学生活の様々な場面の中で、実用的な会話として使われています。会話場面は、本文の「亜紀と拓の留学日記」の中で47例、前後の見返しで25例、合計72の対話文としての会話表現が使われています。

(1) 「亜紀と拓の留学日記」

留学生活を大きく 1.ホストファミリーの家 2.食事と手伝い 3.アメリカの学校 4.楽しい休日の4つに分けています。4つの項目はそれぞれ、初対面のあいさつと家の中の案内、食事と手伝い、学校でのランチタイムや休み時間、授業と放課後、さらに市内観光や週末旅行など、具体的な生活場面に分かれています。

留学生の亜紀と拓は同じ高校に留学しますが、様々な留学生活を紹介するため、別行動をとり、ホストファミリーも異なって設定されています。

会話の場面や表現は基本的なものを配置してありますが、学習者の生徒に興味を持たせるため、画面には面白い人物や動物を登場させ、時には少しオーバーに描き、楽しくユーモアのあるイラストを心がけました。

なお、留学の会話だけでなく、アメリカの文化的な背景や地理的な説明を簡単にまとめた「一口コラム」を場面ごとに準備しましたのでご活用ください。

◆垂紀と拓の留学日記2

垂紀と拓の留学日記 2

2. Helping the family

食事と手伝い

食事

1 Help yourself. Thank you. I will.

2 How do you like the meat loaf? Oh, it's delicious!

3 Thank you for the wonderful dinner. I'm glad you enjoyed it.

4 Pass me the salt, please. Here you are.

5 Sharpening is not always a bad manner in Japan. Really? It's interesting! How does it taste? It doesn't have much taste.

46 forty-six — 垂紀と拓の留学日記2

手伝い

1 Can you help me do the dishes? Sure. I'd be happy to.

2 May I help you? Yes, please. Will you clear the table? Thank you for vacuuming the room. You're welcome.

3 Do you mind feeding the cat, Taku? No, not at all. I'll take care of it.

4 Do you want to mow the lawn, Taku? OK. Show me how to do it, please.

5 May I use the washing machine? Sure, go ahead.

ひとくちコラム
ゲストもお手伝い
英語圏の人々は、ゲストに家族の一員としてリラックスしてもらうことが一番のもてなしと考えています。ホームステイしたら、家族の一員として積極的に家の手伝いを申し出ましょう。

Helping the Family — forty-seven 47

◆垂紀と拓の留学日記4

垂紀と拓の留学日記 4

4. Enjoying Holidays

楽しい休日

市内観光

1 Where would you like to visit? The Statue of Liberty and...

2 Where's the tourist office? Sorry, I'm a stranger here, too.

3 May I have a free city map? Sure, here you are.

4 Which tour do you recommend? How about this special tour?

5 I'd like to sign up for the city tour. Certainly. It'll be 80 dollars.

ひとくちコラム
時差があるアメリカ
アメリカの本土は、西から太平洋、山岳、中西部、東海岸の4つの時間帯に分けられ、順に1時間ずつずれていきます。ロサンゼルスとニューヨークの東海岸では3時間の時差があり、長距離バスや飛行機を利用して移動する場合は気をつけましょう。

週末旅行

1 What are some sightseeing spots here? How about the Art Museum?

2 Does this bus go to the Art Museum? No. Please transfer to No. 50 at the next stop.

3 May I take a picture here? Yes, but no flash, please.

4 I'd like a ticket to Boston, please. Round-trip or one-way?

5 How would you like to pay, cash or charge? Cash, please.

6 May I help you? I left my bag on the train.

86 eighty-six — 垂紀と拓の留学日記4

Enjoying Holidays — eighty-seven 87

(2) 前見返しと後ろ見返し

現行版では、日本の空港の発着便ゲートの場面と外国からの日本留学生のお別れパーティの場面が描かれていますが、新版ではニューヨークの国際空港の到着ゲートと垂紀と拓のアメリカでのお別れパーティとなっています。また、現行版にはなかった留学日記の中の一部として連結するストーリー性を入れました。

①前見返し

ニューヨークの国際空港の到着ゲートで、垂紀と拓がホストファミリーとあいさつを交わす場面が描かれています。空港では、荷物受け取り所、税関、手荷物検査、両替、案内などの場面で接触する人達との会話を配置しました。また興味を持たせるため前見返しは、様々な動物（オウム、タコや鴨、カンガルー、ヘビ、ラクダ）や人物（サンタクロース、自由の女神像、カリブの海賊、宇宙人、原始人、飛脚）、そして物（石の貨幣、サンタのみやげ袋、海賊の宝石）がユーモラスに描かれています。留学の導入部分になりますが、楽しく学ぶことができます。

②後見返し

垂紀と拓が帰国するので、そのお別れパーティ会場での会話場面が描かれています。前見返しと同じように人物（リンカーン、自由の女神像、スーパーマン、サンタクロース、カリブの海賊、宇宙人、原始人、飛脚、忍者）や動物（オウム、猫、犬、リス、ハト、トナカイ、ペンギン、鴨）などがユーモラスに描かれています。ここでの会話は、滞米中の感想や思い出、別れのスピーチ、あいさつなどが準備されています。

(3) スターになって自己紹介

スターの写真ですが、新教科書では現行版のイチョー以外は全て差し替えました。生徒が興味を持つように若者の夢と希望を実現している人達を基準に選び、現在の時代の中で、スポーツ、芸能、政治、映画、作家、デザイナー、宇宙飛行士など世界で活躍している人や過去の人でも社会的に活躍した人を中心に掲載しました。生徒と一緒に楽しみながら活用ください。

終わりに

新教科書は現行『SELECT Oral Communication II』から『SELECT English Conversation』に科目名が変わりますが、「使いやすく教えやすく」、「生徒が楽しく学べて積極性が身に付く」「基本表現を繰り返すので無理なく身に付く」「評価がしやすく教材が充実」など、基本方針は全く変わりません。また、新学習指導要領の追加項目には「垂紀と拓の留学日記」を新しく加え、『英語会話』のテキストとしてさらに充実致しました。是非ご活用ください。

最後に、現行教科書、新教科書に一貫して流れる編集方針は「積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育てる」です。『英語会話』は、文法や、音声上の完璧さを目指すのが目的ではありません。恥ずかしがらずに積極的に話し、発表し、聞くことが最も重要です。英語を話そうとする生徒を励まし、評価し、自信を持たせる指導を先生方へお願い致します。

◆前見返し

Welcome to New York!
At an International Airport

1 Open your suitcase, please. My bag hasn't come out yet. What's the purpose of your visit? Sightseeing.

2 Where can I exchange money? I have a credit card. Where can I exchange money? I have a credit card.

3 How long are you going to stay? Four days.

4 How can I get downtown? Take Subway Line No. 7.

5 OK, Carlos. Please call me Carlos.

6 Nice to meet you, Mr. Green. Nice to meet you, Jake.

◆後見返し

Welcome to New York!
It's a Farewell Party

1 Hello, everyone. How I have enjoyed my stay in New York. It's been great. How did you like the USA? I liked it very much. I'll never forget your kindness.

2 Thank you very much for everything. I'm leaving tomorrow. No, don't. Here's a gift for you. I hope you like it.

3 Please say hello to your family. Thank you, I will.

4 My pleasure. Would you like to dance with me? I'll never forget your kindness.

5 That's nice. Let's keep in touch.

6 You've come back earlier.

『CROWN PLUS Level 3 New Edition』の特長

— 改訂を終えて

東京大学 山本史郎

1. 新学習指導要領との関係（文法・文構造）

『クラウンプラス』はその名前のように、「学習指導要領」に発展的内容を加えた、プラスαの検定外準教科書です。

新学習指導要領では文法に関して、英語Ⅰ、Ⅱで学習すべき以下の文法事項がコミュニケーション英語Ⅰですべて扱うことになりました。

- ・不定詞の用法（原形不定詞の用法など）
- ・関係代名詞の用法（先行詞をとらない関係代名詞 what や非制限的の用法など）
- ・関係副詞の用法
- ・助動詞の用法（過去形、受け身表現、完了形を用いた過去に関する推測の表現など）
- ・代名詞のうち、it が名詞用法の句及び節を指すもの（形式主語として it が名詞用法の節を指すもの、形式目的語として it が名詞用法の句及び節を指すものなど）
- ・動詞の時制など（現在完了進行形、過去完了形など）
- ・仮定法
- ・分詞構文

『クラウンプラス』では、それらはすべて Level 3 でカバーされています。さらに検定教科書では扱わない発展的な文法事項も含まれます。

例えば分詞構文では、

〈接続詞＋分詞〉

You should be careful not to lose your passport **when traveling** abroad.

〈分詞の意味を強調する as 節〉

Loving opera as she does, she naturally tried to get a ticket.

〈being が省略された分詞構文〉

Confident that they would win, the players were all relaxed when they arrived at the stadium.

といった文法事項を取り上げています。

また今回の指導要領で「文構造」という名称が変わった、今まで「文型」と呼ばれていたものでは、There ～ . のところで、

〈There + 助動詞 + be 動詞 + 主語〉

There **must** be a better place than this.

〈There + be 動詞 + 主語 + 分詞〉

There are about hundred people **waiting** in the line.

〈There + be 動詞以外の動詞〉

Between the mountains there **lies** a large lake.

といった項目を扱っています。

高度な英文に対応できる読解力を養成するために必要な、一歩進んだ文法項目・文構造を『クラウンプラス Level 3』では取り上げています。

2. 新学習指導要領との関係（語彙）

続いて語彙に関してですが、今回の学習指導要領では、中学で約 1,200 語、高校のコミュニケーション英語で約 1,800 語（Ⅰで 400 語、Ⅱで 700 語、Ⅲで 700 語）、計約 3,000 語を指導することになりました。

『クラウンプラス』の語彙は、Level 3 のみで約 3,000 語あります。Level 4 はプラス約 1,500 語で、Level 3 と 4 を合わせると約 4,500 語になります。

Level 3 でセンター試験に必要な語彙レベルをほぼカバー、Level 4 で難関大学にも対応できる語彙レベルが身につくようになっています。

3. 『Level 3』改訂のポイント

今回の『クラウンプラス Level 3』の改訂では、授業でより扱いやすくなるように改良しました。具体的には、各レッスンのはじめにあった Grammar Points (文法の要点) を本文ページの後ろに移動、レッ

スンの導入を文法ではなく、本文に変更しました。

また1つのレッスン本文を5つのセクションに分け、区切りをはっきりさせました。

今までは一文が次のページにまたがることもありましたが、今回はすべてページ内でパラグラフが収まるようにしてあります。そして本文の内容を理解しているかすぐに確認できるよう、次ページ（同じ見開き）に True or False を新設しました。

Expressions (イディオムを中心とした表現) では、生徒に辞書を使って調べさせたり、文脈から類推させたいという声が多かったため、今回から訳を外しました。一方、どこで学習したかすぐにわかるよう、巻末に Expressions と単語の掲載ページのリストを新たに作り直しました。

次に問題演習に関してですが、Comprehension Check では、レッスンの内容を把握しているか確認するのはもちろんですが、表現する力をつけるように、英問英答の問題を中心にしました。

Exercises は、今までは各文法事項に対応させた確認問題が中心でした。その対応がわかることで問題自体がやさしくなってしまうきらいがありましたが、今回の改訂で Grammar Points の文法項目だけでなく、Expressions も合わせた文法・表現の総合的な演習にすることで、学習内容の確認とともに解く力を養う問題に変更しました。

最後に『クラウンプラス』で最も重要な題材について触れておきます。今回の改訂で、3つのピースを新たに書き下ろしました。そのうちの2つは、世界でも高い評価を得ている日本人についてです。

1人目は、葛飾北斎。雑誌『Life』の特集で、1001年から2000年の千年紀で人類に影響を与えた最も功績のある人物100人の中に選ばれた唯一の日本人です。名作の多い北斎ですが、その中でも最も有名な「神奈川沖波裏」に焦点を当て、その魅力と、この傑作がどのようにして生まれたかについて述べています。ゴッホやモネなどヨーロッパの印象派に多大な影響を与えた一方、北斎自身ヨーロッパの絵画から多くのことを学んでいました。また波の力強さ、造形の美しさは日本人の彫刻師、伊八の作品からヒントを得たとされています。

2人目は、^{みなかたかくす}南方熊楠。江戸時代末期に生まれながら、19歳で渡航、15年間海外で学びます。有名なイギリスの科学雑誌『Nature』に数々の論文を発表

するなど、生物学者、博物学者として知られる熊楠ですが、生涯で一度、国に敢然と闘いを挑んだことがあります。それは明治政府が発令した、一町村で神社は一社のみにし、それ以外の神社は廃止せよ、という「神社会祀令」に対してでした。神社の廃止は、それに付随する鎮守の森を破壊することになり、棲息する動植物を絶滅させることにつながります。そして鉄砲水などの災害を起きやすくし、憩いや癒しの場、村祭りや神事など文化を育む場を喪失させ、その結果、人々のつながりや絆が薄れ、地方が衰退してしまうこととなります。

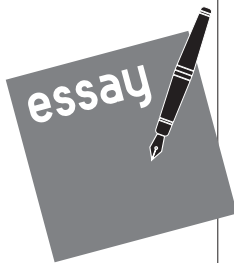
熊楠は日本ではじめて「エコロジー」ということばを使って、鎮守の森がいかに動植物や人間、あらゆる生物にとって重要であるか、訴えました。10年におよぶ闘いの末、ついに神社会祀令は廃止されます。熊野古道が守られ、現在世界遺産に登録されているのも熊楠のおかげです。

3つ目は、人間をはじめ生物にとって不可欠な「水」です。2025年には水不足が深刻化し、水が石油以上の戦略物資になると言われています。Blue Planet と呼ばれ、豊かな水をたたえる地球ですが、実際に使用できる水は全体のわずか0.0001パーセント程しかありません。ほとんどは海水、もしくは氷河です。

日本の水利用の問題や、旧ソ連の失策で琵琶湖80個分の面積が消失したアラル海の惨状などを通して、日本に^{いにしえ}古からある考え方「吾唯足るを知る」がこれからの地球に求められる「持続可能な開発」のヒントになるのではないかと提起しています。

この3つの新しいピースを含む全12レッスンは、高校生の知的好奇心を刺激し、精神的成長を促す題材を幅広く扱っています。900語から1,300語の読み応えある英文で書かれており、論理的展開を意識しながら、しっかり内容を味わってほしいと思います。





Team Teaching Revisited

湘南工科大学 Don Maybin



I have lived in Japan for over half of my life and have had a range of teaching experiences, including working alongside Japanese teachers in public schools. I have also coordinated team taught programs where I served as the non-native instructor, for example, in Thai and French. Recently, I conducted workshops for foreign and Japanese instructors working on the AJET program. I heard praise and complaints similar to those I had myself many years ago. The French have an expression for this: “Plus ça change, plus c’est la même chose.” – The more things change, the more they are the same.

My first team teaching experience took place in 1984, before the Ministry of Education (文科省) programs were established. While living on Shodo Island in the Inland Sea, I was approached by two local high schools to work alongside their teachers in class. The goal was to give island kids a chance to interact with a native English speaker. My experience with each school was radically different.

In the first school, I excitedly arrived on the first day to consult with my teaching partner. What were the activities? How would we interact? Would I be responsible for some sections or would we do everything together? But the teacher I was to work with, F-sensei, didn’t appear until minutes before the class started. When I asked about the lesson plan he said, “何でもいい。 – Anything is okay.” then walked to the back of the classroom and sat down. I felt like a curiosity on display. Sadly, my eagerness soon disappeared and I did not look forward to working at this school.

Fortunately, my team teaching experience at the second school was completely different. I met the instructor assigned to work with me, Y-sensei, several days before we began teaching. He led me straight to his desk in the staff room and showed me the activities he had planned for our first lesson together. His English wasn’t perfect, but his attitude was. We discussed who would do what and things went incredibly well in class. Y-sensei was completely involved in the lesson and inspired his students –

and me – with his pleasant, approachable manner. I finished the school year with a new friend, convinced that team teaching could work with planning and sensitivity towards your teaching partner.

A few years later, I became the Community Supervisor at the Language Institute of Japan (LIOJ) in Odawara. LIOJ had just received a contract for team teaching with a local high school and I was asked to set up the program. Thanks to my experience with Y-Sensei on Shodo Island, I was very excited. The LIOJ group worked closely with the local teachers, planning lessons and assigning duties. Everyone knew what their tasks were and did them well. We ended the school year on a high and frightening note: 40 education officials came to watch our classes – as many observers as students! Subsequently, Odawara City asked LIOJ to expand the program to seven schools, a testament to its success.

Why was the LIOJ team teaching program so successful? Positive rapport between local teachers and LIOJ staff was the key. Our program was founded on three principles.

1. Consultation is critical.

I learned on Shodo Island that taking time to discuss the role of each teacher is essential. Both teachers are under pressure: the local teacher doesn’t want to look incompetent in front of students, the visiting instructor doesn’t want to be treated like a dancing poodle for entertaining students. Meet in the staff room, over coffee in a café or simply talk on the telephone. Consultations go a long way to making your classroom efforts a success. And you may make a new friend in the process!

2. Lesson plans equal less stress.

Your end goal should be a concrete lesson plan that you are both satisfied with. A good lesson plan is like a stage script with clear activities, estimated time and assigned “roles”, or tasks. In other words, who does what and how long will it take. A lesson plan reassures both teachers and makes for productive discussion before, during and after the lesson.

3. Attitude saves the day.

Teachers should respect each other’s efforts. Each teacher has his or her own strengths. The local teacher knows which students will best model an activity; the visiting teacher can add energy to a repetitive routine. Design the lesson plan around these strengths then maintain a flexible attitude. If an activity is not going well, talk with your partner and make adjustments in class. Students are not stupid. If they see their teachers working well together, they will respond with respect, too.

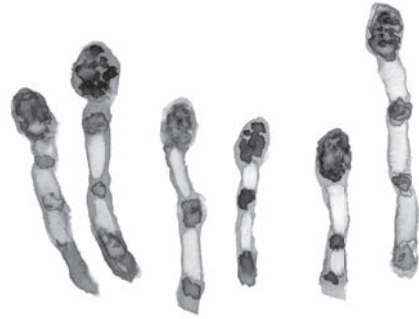
Years have passed since my classes on Shodo Island and I have had many chances to team teach, both as a native English speaker and as a non-native speaker of French, Spanish, Japanese and Thai. I know that with planning, patience and sensitivity towards your teaching partner, the end result is a productive experience for everyone, especially your students.

* For a longer version of this essay, as well as two earlier articles on team teaching in [Cross Currents](#) and [The Language Teacher](#), check out entry 36 in my blog “Fool for Language” at <http://blog.donmaybin.com/>.

センター試験の 分析と対応

渡辺 聡

東京学芸大学附属特別支援学校



① 2012年度「筆記試験」の分析と対応

1. 全体的な傾向

今年のセンター試験[筆記]でもコミュニケーション能力と読解力を試す問題が出題された。設問形式が若干変わった箇所があるが、全体的な傾向は変わっていない。レベルとしては例年通り基本的な問題が多く、平均点は昨年度より1点強高くなり、124.15点となった。第3問～第6問の語数が昨年度より200弱増加し、総語数は4,000語を超えた。

コミュニケーション能力をみる問題としては、
第1問A：単語をきちんとした音で発話する能力
第1問B：単語を正しいアクセントで発話する能力
第2問B：対話がスムーズに流れるよう、適切な発話を考える能力
第3問A：初出の単語や表現でも、全体の流れから意味を類推する能力
第3問B：発言の内容を要約する能力
が例年通り求められている。

また読解力では、
第3問C：パラグラフ単位で文章の構成を論理的に思考する能力
第4問：グラフや表、説明文を参考にして文章を正確に読み取る能力
第5問：留学をした2人のスピーチを読み、英文やイラストを正確に把握する能力
第6問：論説文の流れを正確に追い、論の展開をつかみながら長文を読み取る能力
が試される。いずれも文章の全体的な流れをつかんだ上で、的確な情報を読み取る日頃の学習姿勢が問われる。

2. 具体的内容分析

<第1問>

形式と問題数、配点は昨年度と変わらず。

A 発音 (8点：解答数4)

基本的な単語の発音(母音字と子音字それぞれ2問)を問う問題。/ju:/と/u:/の区別(問1)はやや難。黙字(gh(問3))も出題された。

B アクセント (6点：解答数3)

単語のアクセントのある箇所を問う問題。昨年度と同様、今年度も2、3、4音節の語が1つずつ出題された。昨年度は見出し語がなくなったが今年度は復活し、見出し語とアクセントの位置が同じ語を選ぶ形式であった。個々の語の正確なアクセントがより問われるようになった。カタカナにしたときのアクセントに惑わされやすい語(modern, athlete, career(問1)、musician(問2)、identity, automobile, electronics(問3))も複数出題された。

<第2問>

形式と問題数、配点は昨年度と変わらず。

A 語彙、語法、文法 (20点：解答数10)

語彙、イディオム、動詞の用法等を判断する問題。対話形式での出題数は2に増えた(昨年度は1)。動詞の用法を問う問題(The important meeting will have finished by the time she arrives.(問3))は頻出である。イディオムやコロケーションの力を併せて要求する問題(depending on(問2)、on the condition that～(問6)、not～either(問7)、carry out(問10))も相変わらず多い。基本的な動詞や形容詞(adopt(問1)、vertical(問5))、スペリングの似た語、関係詞、不可算名詞や同義語等の幅広い知識もあわせ持っておきたい。

B 対話文完成 (9点：解答数3)

対話文を完成させる問題。発話数は4～5。空欄で何を言っているのかを次のせりふから導き(nowからwait for about an hourを[問1]、can waitからnowを[問3])、副詞(Then, [問2])から文脈の流れをつかむ。会話でよく使われる表現(be supposed to～[問2]、can't make it(問3))等に慣れておくことも大切である。

C 語句整序 (12点：問数3、マーク数6)

各文の中に含まれる語彙・語法を使い、意味の通る文にする問題。選択肢の数がすべて5になり(昨年度は6)、1問は対話形式(昨年度と同じ)である。動詞の用法(形式目的語(find it～to…[問1]、force+O+to～[問3]))や付帯状況(with+O+過去分詞[問2])等、文法の知識も併せて確認しておきたい。

<第3問>

形式と問題数、配点は昨年度と変わらず。

A 語やフレーズの意味類推 (10点：解答数2)

下線部の単語やフレーズの意味を全体から類推する問題。対話やパラグラフの中でどのように論が展開しているか、状況が推移しているかを正確に読み取り、ヒントとなる語(句)を探して想像力を働かせる。

B 発言の意図の要約 (18点：解答数3)

3人の発言の要旨を選ぶ問題。ある事柄を別の表現で言い換えている(it(=watching television too much) can delay their(=young children) speech developmentをyoung children who watch television a lot may not learn to talk as early as they should.で[空欄29]、as long as the viewing time is limited and the contents of the programs are checkedをif it(=watching TV program) is carefully monitoredで[空欄30])ことが多いので、3人の発言の主旨を理解し、まとめる柔軟な読解力が必要とされる。

C 適文補充 (18点)：解答数3)

指定された空欄に、選択肢で与えられた適切な文や文の一部を補う問題。

選択肢の文中、及び挿入箇所前後の代名詞や指示語、接続する語(句)に注意を払い、論が正しく展開するように当てはめていく。[空欄32]では直前のIndeed,があること、[空欄34]の文頭にはIn

conclusion, とあるように結論の段落になるが、最終文のAlmonds and peanuts are plants which differ greatly, despite their notable similarities.につながるものを選ぶ。選択肢のdistinctの意味がわかっていることが前提となる。

<第4問>

形式と問題数、配点は昨年度と変わらず。

A グラフ読み取り問題 (18点：解答数3)

本文とグラフや図を参考に、展開される論からの確かな情報を得る力を問う問題。本文で与えられた情報を順次グラフに当てはめ、情報の内容を言い換えた表現を読みこなす。第3段落の第1文のeven after seasoning, there will always be some small changes in size due to changes in the humidity of the surrounding airと、選択肢②が同じ内容であることを正確に読み取れるか(問3)、がポイントになる。

B 広告読み取り問題 (15点：解答数3)

広告から適切な情報を読み取る問題。設問を読み、与えられた条件をもとに、合致する情報がどこにあるのかを探し出していく。問いに関する情報は上から順に出てくるわけではないので、設問の求める情報がある箇所(複数の情報を合わせる場合もある)を的確につかむことが大切である。

<第5問> (30点：解答数5)

形式と問題数、配点は昨年度と変わらず。

2人の発言から、事実の確認とそれぞれの感想の違いをとらえる。ここでも、本文の(I) didn't have much time to interact with them(=my host family).が、選択肢ではHis host family had little time to spend with himに[問2]、本文のI wish I had learned more about Canadaの意図が、選択肢ではThere were not many classes about Canadian culture.[問3]で表されている。それぞれの発言から、ある事項に対する考え方を丁寧に拾い上げる力が求められる。

<第6問> (36点：問数6、マーク数9)

形式ではA、Bに分かれ、Aでは内容把握、Bでは表を埋める形式で段落の要旨を選ぶ問題である。問題数、配点は昨年度と変わらず。

段落構成を問う問題が、段落の要旨を順に並べ替える問題になった(設問B)が、論全体の意図をまとめる問題(問5)は例年通り出されている。各パ

ラグラフのポイントをつかみ、話がどのように展開し、筆者の主題の要点は何か、という広くかつ深い読解力が求められる。また、正解の選択肢は本文で使われていない単語や表現で求められる場合も多いので、基本的な類義語を理解する力も必要である。

3. 昨年度から変化のあった点

- ①総語数が300語弱増え、2年連続で増加し、4,000語を超えた。特に増えたのは
第2問Bが3割強（約50語）
第3問Aが4割強（約60語）
第4問Aが3割強（約130語）である。
- ②第1問Aで、アクセントのない母音の発音を問う出題はなくなった。
- ③第1問Bの見出し語は復活した。
- ④第2問Aで対話形式が1問から2問に増えた。
- ⑤第2問Cで選択肢の数が6から5に減った。
- ⑥第4問Aで本文中の空所補充はなくなった。
- ⑦第4問Aでグラフの項目を特定する問いが復活した。
- ⑧第6問で段落構成を問う問題が、段落の要旨の流れを選択肢から選ぶ問題から、4か所に当てはまる要旨を当てはめる問題になり、Bとして独立したものとなった。

4. 新しい傾向が見られる点

- ①一昨年度、昨年度と総語数が増加している。
- ②第6問で、段落構成を問う問題が、段落の要旨を順に並べ替える問題になり、設問Bとして独立した。

5. 日頃の学習で大切なこと

- ①多面的に語彙を増やす
ただ単に単語の1つの意味だけを覚えるというのではなく、英語での定義、反意語、同義語、接頭辞・接尾辞、品詞の転換、自動詞・他動詞等、語彙を様々な方法で多面的に増やしたい。語彙に関連性を持たせると、未知の語に遭遇したときにも想像力を働かせてなんとか意味がつかめるようになる。また、カタカナになっている語の英語と日本語の意味の差異や発音・アクセントに注意して覚えるのも1つの方

法であろう。

②語と語のつながり（語法、Collocation）に関心を持つ

ある単語を頭に入れる際、その語がどのような語と一緒に使われることが多いのか、英語としての語と語の自然なつながりに気を配る習慣を身につけておきたい。単独だとイメージしにくかったり、覚えにくいような単語も、自分が理解しやすい組み合わせなら、より効率的に覚えられる。

③英語を聞き、自ら口にする

アクセント・強勢・構文（主語と述語の区切れや省略等）に注意を払って日頃から英語を聞き、音読をする。単語一つ一つの音に注意を払い、そして文全体の内容を理解しながら読み進む。何回も繰り返して読み込んでいけば、なによりも英語の音に対する興味・関心が必ずや増し、同時にリスニング試験の対策にもなり得る。

④わからない語があっても、前後関係からその意味を類推する習慣をつける

すべての単語の意味がわからなくても主旨は理解できる、と余裕を持って文章を読み進めたい。未知語に出合うとすぐに辞書で意味を調べる読み方をしていると類推力、想像力が身につかなくなってしまう。

⑤論理展開を重視した読解力を養う

どんな読み物でも最後まで通して読み、論の展開がどのようになっているかをパラグラフ中心に考える。接続語を手掛かりに、パラグラフがどのように構成されているか、全体の論調を捉えてから各パラグラフのキーセンテンスを探し、要旨をまとめる。「木を見て森を見ず」にならない大局的な読み方を心がけたい。

⑥多読を心がける

80分で4,000語を超える分量の英語を読みこなすには、普段から500～1,000語の文章をある程度のスピードで読むことを習慣とすることが大切である。授業では精読を中心に行っているが、時には様々な分野、テーマ、形式の比較的易しい文章に多く触れるような機会を与え、分量をこなす読み方も覚えさせたい。

II 2012年度「リスニング試験」の分析と対応

1. 全体的な傾向

過去5年間ほぼ同じ出題形式である。解答数、配点いずれも昨年度と同じである。読まれる総語数（1,100語強）は昨年度とほぼ同じ。読み上げ速度は昨年度とほぼ同じで自然な感じであるが、音声面でのリダクションもあり、聞き取りにくい箇所もあったと思われる。問題音声も設問ごとに2回流された。比較的素直に英語の内容を問う基本的な問題だが、平均点は昨年度よりやや下がった（今年度24.55点、昨年度25.17点、一昨年度29.39点）。

2. 具体的内容分析

<第1問>対話ビジュアル（12点：解答数6）

●男女2人の対話を聞き、適切なイラスト、数字、文を選択する

●各対話の総語数：30語前後

文や単語を選ぶ設問3問、イラストを選ぶ設問2問、場所を選ぶ設問1問の形式は昨年度と同じである。対話に出てくる語（句）や数字がそのまま答えになるとは限らず、簡単な計算をする設問もある。キーワードは2番目～4番目のせりふに出てくる。一部聞き逃すと正答にたどりつけない設問（I'm at the one outside.〔問6〕）や、日常会話でよく使われるフレーズ（I've got to〔問4〕、We can't make it〔問5〕）、日本語とは逆の意味になる言い回し（下記下線部参照）も出てくるので、集中して聞く姿勢も問われる。

問4

Woman: Are you training for tomorrow's competition?

Man : Yeah, I've got to do better. Last time I came in second.

Woman: That's not so bad.

Man : Yes, it is. I want to win this time.

<第2問>対話応答補充（14点：解答数7）

●対話を聞き、最後の発言に対する相手の応答を選択する

●各対話の語数：約20～約30語

相手の述べたことへの自然な反応を考える。昨年度は応答の前のせりふはすべて平叙文であったが、

今年度は疑問文で終わる対話の設問も2つあった。また、That would really help.（読み上げ文）やNo problem.（選択肢）〔問7〕、cut downやhurt（読み上げ文）〔問9〕、it went well（読み上げ文）〔問10〕、You go on to the meeting. I'll catch up later.（読み上げ文）〔問13〕等、日常会話でよく使われるフレーズにも慣れておきたい。

<第3問A>対話内容Q&A（6点：解答数3）

●対話を聞き、その内容についての問いを読み、答えを選択する

●各対話の総語数：50語前後

5W1Hで始まる質問の答えを対話から探す。せりふの数が8に増えたものが出題された（昨年度は5か6のみ）。対話を最後まで聞き、状況や流れの変化をきちんと捉える。事前に選択肢を読み、最初のせりふを聞いた段階で場面が想像できるようにしたい。話者が相手に同意しているのかそうでないのか、といった話の流れをつかむ力とともに、選択肢のsearch for the book〔問15〕が、せりふのlook it up in the database firstの言い換えであることを理解し、せりふのWhy don't we plant that first?のthatが前文のspinachを指す〔問14〕といった内容を正確に把握する力も求められる。

<第3問B>対話ビジュアル（6点：解答数3）

●対話を聞き、その内容からわかることを表の空所に埋める

●対話の総語数：約140語

聞き得た情報を順に図表に当てはめていく。選択肢の数字がそのまま読まれるとは限らないし、指示代名詞thatが何を指すのに加え、more than twice the distance of the third stageの計算も必要とされる設問（解答欄④）のように、情報が揃いきらなないと答えられない場合もある。また、情報は上から順に出てくるとは限らない（解答欄④が一番最初に埋まる）ので注意が必要。

<第4問A>

Short Passage 内容Q&A（6点：解答数3）

●Short Passageを聞き、その内容についての質問を読み、答えを選択する

●各せりふの総語数：100語前後

問20

Towering skyscrapers are a symbol of modern society. In the late 1800s, new technological developments made very tall buildings possible. One development was steel building technology. Before that, architects were required to create thicker stone walls to support taller buildings. These walls were extremely heavy and allowed less room for windows and light. After mass production of steel was introduced, architects began to use steel frames to support a building's weight. Steel was much lighter and stronger than stone, while taking up much less space. At the same time, elevator technology and fire-resistant building materials also helped make skyscrapers possible.

質問文から事前に推測した状況をもとに、出てきた情報を一つ一つ積み重ねていき、求められる情報の所在を明らかにする。選択肢では答えとなる語を別の表現で言い換えたりまとめることがある（上記下線部をSteel frames allow more space for windows.に〔問20〕場合も多いので、要点をつかむ力も求められる。

<第4問B>説明文内容Q&A（6点：解答数3）

●説明文を聞き、その内容についての質問を読み、答えを選択する

●説明文の語数：200語強

質問文に目を通し、事前にどれだけの状況を想定できるかがポイント。全体の内容を総合的に理解する力と、求められた情報を正確に取り出す力が必要であるが、ここでも選択肢では答えとなる箇所が別の表現で言い換えられている（people wanted clothes as bright as flashy as their hopes for the futureがThey reflected the dreams of many Americans.に〔問24〕）ことがある。話の流れが変わったり固有名詞も出てきたりするので、メモを取りながら質問されるポイントの箇所を絞って聞くことも大切である。また、1回目と2回目の読み上げの間に約45秒のポーズがあるので、情報が出揃った段階で各問の答えを絞り、2回目は確認の作業に当てたい。

3. 対応のポイント

①状況・場面を想像する力を育成する

事前に問題指示文、選択肢、イラスト、状況説明文等に目を通し、内容を推測しておく。聞く前に精神的なプレッシャーをできるだけ少なくしておくことも正しい聞き取りへの第一歩である。

②英語特有の表現に慣れる

Come on. One piece won't hurt.〔問9〕、it went well〔問10〕、care for〔問14〕、～ is worth looking into、I doubt～〔問16〕のようなフレーズは聞けるだけでなく、意味が自然に頭に入るまで聞き慣れておくようにしておきたい。

③対話の流れや方向性をつかむ

リスニングでは、話の流れを理解し、これからどのような展開になるのかを推測する能力が求められる。その際、途中で展開が変わり、最初に出てきた情報が最後まで同じとは限らない。方向性を予測した上で、最後まで丁寧に流れを確認したい。

4. 日頃の学習で大切なこと

①英語の音を聞くことを習慣にする

「継続は力なり」と言われるように、1日5分間でも英語を聞き続けることが大切である。センター試験の英語は自然で標準的なものである。様々なメディアを使って英語の音やリズムを継続的に耳に入れておくことを習慣としておき、英語を聞く抵抗感をできるだけ少なくしたい。耳に入ってきた音をそのまま口に出すshadowingも有効な学習方法の一つであろう。

②聞いた内容を論理的に組み立てる力を育てる

リスニング力をつけるには、聞いた音を頭の中で論理的に組み立て直す作業が必要である。教科書等の、ある程度分量がある文章の内容を理解した上で英語を聞いて論の展開をつかむ。そして音読、Qs & As、dictation等の基本練習を日頃から行い、論理的思考力も養っておきたい。

③語彙を増やし、自分で表現する練習をする

提供される情報の内容を理解するためには基本的な語彙力が必要である。知らない単語は聞き取ることができないし、あやふやな理解では誤った情報を受け取ってしまう可能性がある。また、内容を整理し、別の語や表現を用いて言い換える練習も積んでおきたい。

CROWN クラウン総合英語 第2版

採択No.1教科書CROWNの代表著者が編集した
最強の総合英文法参考書!

霜崎 實 [編著] 1,523円

A5判/オールカラー・648頁(本文608頁,解答40頁)



- 基礎から発展まで重要事項を網羅。
- 理解をさらに深める豊富なコラムを収録。
- 導入編・基本編・発展編の学習しやすい3段階構成。
- 重要事項が見つけやすい機能的な紙面デザイン。
- 生き生きとした例文, 要点を押さえた解説。
- 大学受験に, TOEIC・英検対策に最適。

CROWN PLUS English Series

中高一貫教育にも対応した中高生向け英語テキスト



Revised Edition

CROWN PLUS Level 3 主対象 高1・高2

大学入試を見据えた読解力養成テキストの改訂版

高校英語で求められる論理的読解力の養成を目的としています。

文法=高1~高3相当 英単語=3,000語レベル

B5判/2色刷・224頁 1,000円

[付属教材] WORKBOOK 650円/リスニングCD1,500円

[指導書] 3,780円 <指導用CD・CD-ROM付>



CROWN PLUS Level 4 主対象 高2・高3

Level 3 の上位に位置付けられるテキスト

大学入試で求められる英語力の完成を目的としています。

文法=高3以上 英単語=4,500語レベル

B5判/2色刷・184頁 1,000円

[付属教材] WORKBOOK 550円/リスニングCD1,500円

[指導書] 3,780円 <指導用CD・CD-ROM付>

Level 1 主対象 中1~中3 1,000円

発展的言語材料、多様な読解教材を収録した検定教科書補完テキスト。

Level 2 主対象 中3~高1 1,000円

高校英語への橋渡しのための表現と読解のテキスト

*表示価格は、学校納入価格(税込)

三省堂高校英語教育 2012年 夏号

- 発行 ————— 2012年6月20日 定価100円(本体95円)
- 編集・発行人 ——— 北口克彦
- 発行所 ————— 株式会社三省堂 ●ホームページ <http://tb.sanseido.co.jp/english/>
〒101-8371 東京都千代田区三崎町2-22-14
電話(03)3230-9421(編集) 振替 00160-5-54300
- イラスト ————— 只見 優佳(ただみ ゆか)
- 表紙デザイン ——— 株式会社キャデック
- 印刷 ————— 三省堂印刷株式会社
〒192-0032 東京都八王子市石川町2951-9 電話(042)645-6111(代)

学習機能を充実させた最強のツール 高校生用英語辞典 勢ぞろい!

グランドセンチュリー 英和辞典 第3版 CD付き

木原研三 [監修]
宮井捷二・
P.E.ダベンポート [編]
B6変型判 1,960頁
3,129円

入試に強く、入門から使える中級～上級向け学習英和の最新版。大改訂により収録項目数を飛躍的に増強し、総項目数は6万8千に。2段階の入試頻度表示など、万全の大学入試対策。巻末には1万4千項目収録の和英付き。



グランドセンチュリー 和英辞典 第3版

小西友七 [監修]
岸野英治 [編]
B6変型判 1,760頁
3,045円

入試に強い、入門から使える最強の学習和英! 日常語を強化し、総収録項目数4万3千。英作文に役立つ「ライティングのヒント」欄を新設。生活を表現する言葉を中心に用例を大幅に入れ替え。最新の語法研究を取り入れた、定評ある語法解説。



語法・受験に強い! 現代英語に強い! WISDOM

しかも、進化するウェブ辞書が無料で使える!

ウェブ版英和は全見出し語にネイティブ発音による音声付き。また、英和・和英ともに、教材作成・英作文に便利な新ツール「用例コーパス」を公開中。詳しくは、<http://www.dual-d.net/>へ。

ウィズダム英和辞典 第2版 ウィズダム和英辞典

井上永幸・赤野一郎 [編] 小西友七 [編修主幹]
[並装] 3,465円 [革装] 5,250円 [並装] 3,465円 [革装] 5,460円



基礎からマスター [読む・聞く・話す]



単語力アップのための
工夫がいっぱい

ビーコン英和辞典

第2版
B6変型 2,835円



持ち運びに便利な
ハンディサイズ

小型版

ビーコン英和辞典

第2版 小型版
A6変型判 2,310円